衝動

ようまま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
衝動

【Ｎコード】
Ｎ８７８４Ｎ

【作者名】
ようまま

【あらすじ】
結婚を控え会社を退職した女性「真歩」が、幼なじみの男性と再会し、身体のうちにわき起こる説明のつかない衝動と葛藤するストーリー。
読者をドキドキさせようと思い、書きました。

（一）

（一）

携帯がスプリングコートのポケットのなかで震えた。この雑踏のなかでは着信音は無意味だ。真歩はポケットからシルバーの携帯を取り出すと、耳にあてた。

「今ついたよ。どこにいる？」直之の穏やかな声が聞こえてきた。

「デパートのエントランス。すごい人よ。わたしが見えるかな？」

真歩は大きな声で返答した。

しばらく携帯で話ながら、真歩は人ごみのなかに彼の姿を探した。会社帰りの彼はスーツを着ているはず。きっと、髪が少し乱れてるだろう。この時間に待ち合わせるとなると、かなりのスピードで会社を出たはずだ。もしかしたら息もあがっているかもしれない。真歩は彼の姿を想像すると、口元に笑みが浮かんだ。

案の定、乱れた髪の直之が雑踏の中から姿を現した。春が来たとはいえ、夜はまだ肌寒い。にも関わらず、彼の額には汗が滲んでいた。どれだけ必死に、ここまで駆けてきたのか。

二人は笑い合いながら手をとり、デパートの中へと入っていった。直之のスーツからは汗と埃の匂い。まめとは言えない性格のため、彼はスーツをクリーニングに出すこともまれだった。真歩は直之の袖に顔をつけると、深く息を吸う。不思議と落ち着く自分がいる。

「おつかれさま。こんなに早く会社を出て、何か言われなかった？」

真歩は直之を見上げ訊ねた。

「言われたよ。」直之が笑う。

「めちゃくちゃからかわれた。」困ったような顔を見せた。

「どうして早く帰るか話したの？」真歩はびっくりして声をあげた。

「そりゃ、まあ、理由を言わなくちゃ帰れないだろ。」

それから二人はくすくすと笑い合った。

二階のジュエリー売り場。
いつもは素通りしてしまう、真歩とは縁のないところだ。真歩はぴかぴかに磨かれたショーケースを眺め、不思議な気持ちになった。
「今日はこの中からひとつ選ぶんだわ。」それはとても特別なことだった。
売り場をぐるりと一周してから、真歩は直之を一つのガラスケースへと引っ張っていった。その中には数種類のリングが美しく並べられている。
「これ、どうかな？」真歩はその中央に据えられたリングを指差した。シンプルな大小のプラチナリング。中央には小さな石がはめ込まれている。シンプルではあるけれど、他のリングとはそのたたずまいが異なった。とても上品な感じがしたのだ。
「いいよ、はめてみる？」直之も特に不満はないようだ。
店員は尊いものを差し出すかのように、リングを二人に手渡した。
直之が真歩の薬指にリングをはめる。まるでリハーサルのようだ。
「きれいだわ。」真歩は自分の薬指にぴったりとはまったリングを、うっとりと見つめる。
これは永遠を誓うリング。
「リングの内側には、ご結婚される日付とお名前を彫らせていただきます。」店員がすかさず付け加える。
真歩の気持ちはすでに決まっていた。薬指のリングをなでながら、直之の顔を見上げる。彼は「いいよ。」とあっさり同意した。
そして二人は結婚前に行わなければならない重要な仕事を一つ終えた。

あまりにもあっさりと決まってしまったので、二人は時間を持て余した。食事をするにも少し早いような気がする。
「どうする？もうごはんたべる？」真歩は訊ねた。
「そうだなあ。真歩、おなかへった？」直之が聞き返す。
「減ってはいないけど・・・直之のおうちの近くで食べようか？」

「せっかく銀座にいるのに？真歩の退職祝いをしようよ。」
「いいわよ、退職祝いなんて。節約もかねて、銀座はやめない？このあたりで食べると高いでしょ。」真歩はすでに妻のように振る舞った。
「わかった、いいよ。家計のことは真歩にお任せするから。」直之はくすぐったいような顔をする。
二人は人々が溢れる銀座の夜を背に、地下鉄に向かった。

銀座から地下鉄で一時間弱。
二人は駅前の小さなイタリアンレストランで食事をとり、直之の家へと向かった。
夜風は冷たいが、もう緑の香りがする。
「そろそろ桜が咲くね。」真歩はピンク色に膨らむ、街路樹のつぼみを見上げた。
夜空は雲一つない。
郊外とは言っても東京。
満天とはいかなかったが、濃紺の空にぽつぽつと輝く星が見えた。
直之のアパートの階段をあがる。
部屋は一般的なワンルームで、独身男性が住むにはちょうど良かった。
六畳一間。フローリング。
狭いながらも心地よい空間が作られている。
シングルベッドとテレビ、そして音楽好きな直之らしい、オーディオセット。
南向きの窓には生成りのカーテンがかかっている。
直之はキッチンでコーヒーを入れる。
インスタントでもよい香り。
真歩はベッドの上に座り、彼が慣れた手つきでコーヒーを入れるのをみた。

直之とは大学のサークルが一緒だった。
彼は穏やかな物言い、優しい物腰で、サークルの中でも一目置かれる存在だった。決して目立つ訳ではなかったが、いつのまにか物事の中心にいて、なんとなくリーダーになっているような人。
真歩はこれまでつきあった男性のように、男らしさを強調する様な強引な態度をとらない直之に、なんとなく引かれるようになった。
少しウェーブがかった髪。
優しげな表情。
何より直之から溢れるあたたかな空気に、彼女は心奪われたのだった。
幸い、直之のほうも真歩に興味をもったようだった。彼女自身は、自分のどこを気に入って側にいてくれるのか、わからなかったのだが。
真歩は大学時代から普通だった。容姿も、性格も、成績も、なにもかも。これは決して彼女の自己評価が低いということではなかった。平均的なのだ。ただ彼女自身は気づいていなかったが、両親から大切に愛をもって育てられたが故に、彼女の表情や動作には、特別な優雅さがあった。

社会人になり、二人は別々の会社に就職した。
直之は電子機器メーカーに。
真歩は銀行の窓口に。
社会人になると別れてしまうカップルがたくさんいる中、二人の交際は順調に続いた。
そしてついに、直之は真歩に勇気をもって結婚を申し込んだのだ。
「一生側にいてくれるかな？」
その日の直之は、ずっとそわそわして落ち着きがなかった。
レンタカーで箱根までドライブに出たはいいが、観光するわけでもなく、うろうろと車で走り回った。今思えば、プロポーズに最適なシチュエーションを探していたのだろう。結局、行く先々でたくさ

んの修学旅行生に出会ってしまったため、真歩を家まで送り届けるまで何も言えなかった。ようやく指輪を渡したときの直之のあの顔を思い出すと、真歩はいつもこそばゆい気持ちになる。

コーヒーカップを両手にもち、直之がやってきた。
真歩のカップには、たっぷりの砂糖とミルクがすでに入れてある。長い付き合い。真歩の好みはわかっている。
ベッドに並んで座る。
コーヒーを一口のんで、二人ともテーブルにカップをおいた。
出会った頃のように若くはない。
二人とももう三十歳。
自分達がこれからどんな人生を歩んでいくのか、なんとなく見えてきた。
そしてこれからの人生に、お互いがどのくらい必要なのかもわかってる。
直之は真歩の長くつややかな髪を撫でる。
大学時代からほとんど髪の長さはかえていない。
真歩の自慢の一つでもあった。
直之は真歩に優しく口づける。
「コーヒーが甘すぎる。」直之が言った。
「直之のは苦すぎるわ。」真歩が答える。
そしていつもの通りの愛の行為が始まる。

せまいベッドの上で愛し合った後、真歩は時計を気にした。
「帰るの？」直之が眠そうな声を出す。
「うん。あの家に帰るのも後少しだし。終電で帰るわ。」
「じゃあ、駅まで送ってくよ。」
こんな風に家に帰らなくてはならないとき、大学時代からずっと変わらず、真歩は離れる寂しさを感じる。時に涙することもあった。
でもそれも終わり。真歩はこれからの生活を考えると、この寂しさ

もとても貴重なもののように感じた。
駅までの道のり、二人は手を絡めて歩く。時折互いの顔を見て、たまらず笑顔がこぼれる。

今が一番幸せなとき。
それは間違いなかった。

（二）

二

翌日、真歩は広尾に出た。
結婚に際して、三月末日付けで仕事を辞めてしまったため、平日の昼間は自由に行動できた。
広尾は真歩にはなじみのない町だ。いつきても借りてきた猫のように身が縮まる思いがする。あまりにも落ち着かないので、できれば来たくはなかったが、爪の手入れはここと決めたサロンがあったので、定期的にやってきていた。
天現寺の交差点を曲がり、明治通りに面したビルの二階にそのサロンはあった。
美しく磨かれたガラスドアを押して中に入る。
白い制服に身を包んだ若いスタッフが、真歩の顔を見ると笑顔で会釈をし、サロン奥にあるＶＩＰルームへと案内した。
サロン自体はとても小さい。少数のネイリストがそれぞれにプロフェッショナルの仕事を行っていた。インテリアは白で統一されている。サンダルウッドの香りがサロンに漂う。床は丁寧に磨かれ、塵一つなかった。
真歩はＶＩＰルームの柔らかいソファに腰掛け、やはり落ち着かない気持ちで待った。
運ばれてきたコーヒーに口をつける。
もちろんインスタントではなかった。

そこに扉から一人の女性が現れた。
やはり白い制服に身を包んでいるが、他のスタッフとは雰囲気が異なった。
黒髪を一つにまとめ、長いまつげが印象的だ。

そして真歩を見ると、その美しい顔に子供のような笑みを浮かべた。
「いらっしゃい。」彼女は穏やかな安定した声で話しかけた。
「またお邪魔しちゃった。今日もよろしくね。」真歩はやっと緊張が解けたというように、笑みを浮かべて答えた。
彼女は真歩の大学時代からの親友だ。直之と同様、サークルでともに活動していた。
「今日はどんな感じにする？」彼女は真歩の手を取り、エンゲージリングを静かに外す。
「整えて、色を塗ってくれればいいよ。」真歩も気軽に答える。
「ええ、また？つまんないなあ。ネイリストの腕を振るいたいのに。」彼女は口を尖らせながらも、すでにハンドケアの準備に入っている。
「じゃあ、雪の好きなようにしていいよ。」真歩は言った。
「ほんと？じゃあ、幸せいっぱいの真歩さまにお似合いの、ハートをたくさんつけようか。」雪は上目遣いで真歩を見た。
「え！それはやめようよ。恥ずかしから。」真歩は真剣に抗議した。
すると雪はくすくすと笑いながら「冗談よ。園田君好みの清潔な感じに仕上げますわ。」と言って、優秀なネイリストの顔になった。
雪は大学を卒業してから真歩と同じ銀行に就職したが、たった半年つとめただけで辞めてしまった。その後ネイリストになるべく勉強をし、サロンで何年か働いた後、広尾に自分のサロンを開いたのだった。そして今では都内にある三つのサロンのオーナーだ。
「どう最近は？」真歩は自分の手を真剣に見つめる友人を見ながら訊ねた。
雪はちょっと笑って「もう、必死よ。」と答えた。
「サロンを経営するなんて、なんかかっこいいわなんて思ってたけど、やっぱり勤めているほうがよほど楽だったわ。今は毎日仕事のことしか考えてないの。嫌になっちゃう。」そうはいいながらも、充実したその生活が、雪をさらに美しく見せているようだった。
「真歩は？もう幸せの絶頂でしょう。うらやましいなあ。」

「うん、まあね。」真歩は照れながらも冗談めかして答えた。
「ああ、もう！花嫁はもう少し謙虚でもいいのよ。こんな仕事一筋の独身女を前にしたらね。」雪が軽くにらむ。「よし、やっぱりでっかいハートつけてやろう！」
「それはやめてってば。」真歩が笑った。
雪は慣れた手つきでハンドマッサージを行う。
「でも必死って言っても、順調なんでしょ？仕事。」真歩が訊ねた。
「そうね、徐々に上客もつき始めてるし。」雪はたいしたことではないというように言った。
それから秘密を打ち明けるかのように、声を細めた。
「誰かは言えないんだけど、有名人のお客様もちらほらきてくださるようになってね。気に入ってくださってるのよ、このサロン。」
「わあ、すごいじゃない！ますます大きくなるわね、このお店も。」真歩も自分のことのように喜んだ。
「ねえ、今日の夜、暇？」雪は人差し指の爪に注意深くカラーリングをしながら訊ねた。
「暇よ、もちろん。会社やめちゃったし。」
「じゃあ、今日は早めに帰らせてもらうから、独身最後のはめはずしをやらない？とは言っても、わたしのマンションで朝までガールズトークってことだけど。この間お客様からシャンパンを頂いたんだけど、わたし一人じゃあけられないから。」
「シャンパン！飲んであげるわ！じゃあ、わたしデリでお惣菜でも買っていくね。」真歩が楽しそうに提案した。
「じゃあ決まり。夜九時頃に、駅前のスタバで待ち合わせしましょう。」雪もうれしそうに言った。
「今夜は眠らせないぞ。」雪が男性の声音で言った。
「もちろん、眠らせないで。」真歩が舌足らずの声で応じる。
今は立場も環境も違う二人だったが、こんな風に会話するときは学生時代に戻れる。
雪は真歩の一番の親友だった。

雪のマンションは目黒に新しく建った高級マンションの十階だ。彼女はこのマンションを十五年のローンで購入したという。
「でも意外と早くに返せそうよ。」雪は少し誇らしげに言った。
エントランスにはクリーム色の絨毯がしかれ、コンシェルジュが二十四時間ついている。
真歩がこのマンションを訪れるのはこれで二度目。一度目は直之と共に、引っ越し祝いを届けにやってきた。そのときも思ったのだが、雪が自分たちとは異なるステイタスにいるのだと、痛烈に感じた。
真歩も憧れないわけではない。
都心の一等地のマンションに住む。
でもそれが自分たちとは身丈が異なるということも、十分にわかっていた。
エレベーターで十階へ。廊下にも絨毯が敷き詰められているが、下足で歩くにも関わらず、清潔な印象だった。
彼女の部屋は角部屋の一ＬＤＫ。玄関を入るとすぐに広々としたリビング。リビングは二面に大きな窓。ウッドデッキが敷き詰められたベランダへと通じる。前回この部屋を訪れたときは昼間だったので、美しい植物たちが風にたなびく様が見られた。
真歩は薄手のカーテンを少し開け、窓の外を眺める。そこには東京の夜景。地上にいるときは気づかないきらめき。それもまた美しかった。
三十歳でこのマンションを購入するということは、もう雪は結婚するつもりはないのだろうか。真歩はぼんやりと考えた。
「さあ、花嫁。飲みましょう！」雪が声をかけた。
真歩はモダンな印象のカウチ付きソファに足をあげて座り込んだ。
雪はトレーの上にグラスと買ってきたチーズやハム、そして高級シャンパンをのせて持ってきた。
早速という感じで、雪がそのシャンパンをあける。真歩はこちらに

飛んでくるかもしれないコルクをよけるため、クッションで頭を隠した。
ポンっという大きな音がしたものの、意外とおとなしく封が開いた。
二人は笑いながら互いのグラスになみなみとつぐ。
宴のスタートだ。
飲んでつまみながら、しばらくたわいもない話をする。
同級だった友達のところに子供ができた。
こんなお客さんはうんざりだった。
あのカップルはとうとう別れてしまった。
ウェディングドレスをまだ決められない。
酔いが回ってきて、真歩は身体がほんわりと熱くなってきた。彼女と一緒だとついつい飲み過ぎてしまう。
雪の頬もピンク色に染まっていた。透き通るような肌に浮かぶ桜色。彼女は本当に美しい。真歩はうらやましくて仕方がなかった。
「化粧品は何使ってるの？」真歩は訊ねた。
「クレドポーボーテよ。」雪が答える。高級ブランドだ。化粧水一本が一万円近くする。
「そんな高いのは使えないわ。参考にならないじゃない。」真歩が頬を膨らます。
「だって、わたしはお金の使い場所がないんだもの。サロンと家の往復だけ。デートだってもう何年もしてないわ。」雪がうんざりというように言った。
「デートしてないの？だめ！もうわたしたち三十歳よ。」真歩が声をあげる。
「わかってるわよ。」雪が口を尖らせて言った。
「でもね、とにかく時間がないの。大きな画面で映画が見たいなあって、こんなテレビを買ったけど、ここで映画を楽しんだことなんかないわ。音響だってそろえたのに。」
リビングには五十型の液晶テレビがおかれ、両脇にはスタイリッシュなスピーカーが備え付けられていた。

「映画専門チャンネルだって契約してるのに。見ちゃいないわ。」
雪がぶつぶつ言う。
真歩はテレビのリモコンを手に取り、試しにつけてみた。
確かにすばらしい音響だ。まるで映画館にいるよう。こんなシステムをわたしたちの新居におけたら・・・と考えずにはいられなかった。
映画専門チャンネルを選ぶ。
そこでは、ほんの三ヶ月ほど前に公開されていた日本映画が流れていた。
真歩が見たいと思っていたものだったが、直之と映画の趣味がまったくあわず、結局見れずじまいだったものだ。
真歩が思わず見入る。
つきつめれば、生きることは何かという作品。レビューにはそのように書かれていた。
出演している役者陣も、今一番輝いている人たちばかり。
特にここ一年で急激に露出が増えている、主人公の男性俳優の演技に高い評価が集まっていた。
雪がグラスを口に付けながら画面を指差した。
「この俳優が所属している事務所の社長さんがうちのお客様よ。すっごくきれいな人。それでいてなんかちょっと怖いくらいに、きれる人よ。わたしを指名してくれるんだけど、いつもどきどきしちゃう。」
「そうなの。大変ね。」真歩は気のない返事をする。
すると雪が真歩の顔をまじまじと見つめた。
「何？この俳優が好きな訳？」
「うーん、好きというかね・・・」真歩も少し考える。
「好きというか、ノスタルジックな気持ちになるというか。」
「ノスタルジック？会ったことあるの？」雪が訊ねた。
「いや、ぜんぜん。こんないい男に会ってたら、忘れないでしょ。」
真歩が答えた。

「真歩、それ、この俳優のことが好みってことよ。」雪が言った。
「そうかしら？こんなきれいな顔立ちには惹かれないんだけどな。」
「言われてみれば、そうね。園田君はきれいな男じゃないし。」雪がぼそっとつぶやく。
「何よ！言われなくてもわかってるんだから。でも不細工じゃないわよ。」真歩が抗議の声を上げる。
「ごめんごめん。ごちそうさま。」雪が笑った。
結局二人で最後まで映画を見て、その結末にあーだこーだと議論をかわしていたら、あっという間に朝が来てしまった。

（三）

三

雪のマンションから帰ってきて二三日の間、真歩は家で静かに過ごした。

真歩の家は直之のアパートから電車で十分。東京と千葉を隔てる大きな川のすぐ近くにあった。

真歩の両親は、この一角が宅地造成された時に、一軒家を購入した。小さな敷地にめいっぱいにたてられている小さな住まい。庭とは名ばかりのスペースには、母が育てる野菜がある。そんな小さな住まいがいくつか集まっているような住宅街だった。

彼女の部屋は二階の南側。窓を開けると土手沿いの桜並木が目に入る。川はねっとりと黒くよどみ、流れているようには見えなかった。ただ、土手からあがる川風は、春のにおいを含んで心地よい。真歩はいつもこの窓からの風で季節を感じてきた。

真歩は一人娘だ。他に兄弟はいない。彼女が結婚して家を出てしまうと、この家には両親だけになる。真歩はそれが気がかりだったが、直之はこの近くに新居を構えようと言ってくれている。次男なので、その辺は気が楽だった。

部屋の中には子供の頃から使っているシングルベッド。窓際には大学時代に購入したシンプルなデスクと本棚。グリーンのカーテンが風にたなびく。

クローゼットをあけ、新居に持っていくものを選り分けようとしたが、新居も決まっていないのに現実味がないと、すぐにあきらめてしまった。

気を取り直してクローゼットの上戸棚をあけ、なんとなく捨てられない子供の頃からの品々を取り出した。

「持っていこうかしら？」真歩は埃を払いながら、段ボールをあけ

る。
アルバムに整理しきれない写真や、昔趣味で集めていた折り紙の束、そして今や聞かなくなってしまったカセットテープ。これは自分でお気に入りを編集したものだ。手書きのプレイリストを見ると、この当時恋をしていたことを思い出した。甘酸っぱい思い出。
もう一つの段ボールをあけると、中からは卒業アルバムと詩集、そして今度は整理された写真のアルバムがあった。ぱらぱらとめくってみると、真歩が小学生のころのもののようだ。
「わあ、なつかしい。」級友の顔を眺め、なんとなく思い出す。ああ、こんな子もいたなあ。あれ？名前はなんだっけ？今もこの辺りにすんでいるのかしら？
そして真歩は一枚の写真に目を留めた。
それはこの家の前で家族とともにとった写真。両親と小学三四年生の頃の真歩、そして見知らぬ男の子が一人。

「これは誰？」
真歩は懸命に記憶をたどった。

きれいな顔立ちをした男の子だった。真歩と同い年ぐらい。白いポロシャツに膝までの短パン。黒い髪はやや長めだが、さらさらとしている。そして印象的なその目。二重のくっきりとした目は、年月を経た写真からでさえも、輝いているように見える。
確かにこの顔、この瞳に見覚えがあるように思う。
真歩はアルバムを片手に、一階の台所で昼食の支度をしている母のところへおりていった。
「ねえ、この子誰かしら？覚えてる？」真歩は母に尋ねてみた。
母は白髪が混じる肩までの髪を手で耳にかけながら、なになに？というようにアルバムを覗き込んだ。
「ああ、利明君。なつかしいわねえ。」母はその穏やかで丸い顔に優しい笑みを浮かべた。

「覚えてないの？利明君。お隣に住んでたのよ。」
「お隣？鈴木さんちに子供はいないじゃない。」
「鈴木さんが引っ越してくる前の話よ。山本さんって言ってね。ご両親とも働いてたから、学校から帰ってくると利明君はしょっちゅうううちに遊びにきてたわ。あんたとも仲良かった。」
「そう・・・だっけ？」真歩はなんとなく思い出しかけていた。
「礼儀正しくて、きれいな男の子だったわ。大人びたっていうかね。でも突然引っ越してっちゃったのよ。夜逃げっていうのかしら？わからないけど。挨拶もなかったわ。」
「うん、なんとなくだけど、思い出してきたような。わたし、泣いたよね。いなくなっちゃったとき。」
「そうそう、あのときはなだめるのに大変だったわよ。もしかしてあんたの初恋だったんじゃないの？」
「ええ！初恋は幼稚園のときだもの。違うわ。」
「でも二人とも本当に仲が良かったわよ。でも忘れちゃうものなのねえ。」母はしみじみと言った。
言われてみると、真歩の毎日のなかに、確かにこの男の子がいたような気がする。それをすっかり忘れてしまっているなんて、人の記憶ってあてにならないものなのね、と真歩はぼんやりと考えた。
「さあ、お昼ご飯にしましょうよ。あんたもぼーっと突っ立ってないで、お皿用意して。ほんとにこれで奥さんになれるのかしらね。」
「やればできる子だから、大丈夫よ。」真歩は母の批判を軽く受け流した。

（四）

四

コンビニの袋を下げ、足早に自宅に戻る。
「すっかり遅くなっちゃった。」真歩はスプリングコートの前をぎゅっとあわせる。
今日は会社の元同僚と食事をしていた。彼女はまだ現役の銀行員だ。食事をしながらうらやましそうに何度も「いいなあ、寿退社」とつぶやく。真歩は彼女が泥酔して絡みだす前に逃げ出したかったが、なんとなく引き止められ結局こんな時間になってしまった。
コンビニの袋には缶コーヒー。お酒をたくさん飲んだ日は、コーヒーを飲むに限る。そうすると翌日にひびかないのだ。三十歳をすぎてから、お酒が身体に残るようになってしまった。若いつもりでも、年齢を重ねる変化を感じた。
桜は満開だ。今年は咲くのが遅かった。明日の夜には大学時代の友人達と花見の約束。
「それまでに雨がふらなければいいのに。」と真歩はつぶやいた。
もうすぐ家だ。街灯がついているとはいえ、人通りもなく心細い。少し小走りになる。
そして最後の角を曲がって、真歩はぴたっと足を止めた。

玄関の前に誰かいる。

真歩の家の前にも大きな桜が一本たっていた。花見の時期になると、近所の人々が散歩がてらその桜を愛でにくる。真歩もその華やかさにいつも心奪われた。
「花見の人？」真歩は目をこらしてその人物を見る。
でもすこしおかしい。桜の木を背に立っているのだ。目線は真歩の

玄関に注がれている。
長身の男性。玄関のほのかな明かりに照らされてはいるものの、はっきりとした表情は見えない。道路の少し先に見覚えのないセダンがとまっている。彼が乗ってきた車だろうか。
真歩は心臓が凍り付くような気がした。今ここから携帯で自宅に電話して、玄関まで父親に出てきてもらおうか。
でも。
もう遅いし、ただの花見客かもしれない。
真歩は意を決して足を踏み出した。足早に玄関に駆け込む。

「あの、すみません。」
突然その男性に声をかけられた。
嫌な汗がわっと出てくる。鍵を取り出そうとして、必死に鞄を探る。
そして用心深く振り向いた。

一人の男性が立っていた。
真歩と同じぐらいの年齢。
満開の桜を背に、初めてその表情が見えた。

美しく大きな瞳。
黒髪は月光でつややかな輝きを放っている。
端正な顔立ちだが、どこかはかなげなたたずまい。

そのとき川風が桜を揺らした。
ざわざわという音とともに、白い花びらが宙を舞う。
彼の髪や肩に花びらが散る。
そして彼が微笑んだ。
「すみません。」彼は再び声をかけた。
真歩ははっと我にかえった。
「もしかして、真歩さん？」彼は一歩真歩に近づくと、瞳を覗き込

んだ。
「はい、あの、そうですけれど。」真歩は慌てて返答した。
「そうか、やっぱり。」彼はうれしそうだ。
「あの、失礼ですが・・・どちら様ですか？」真歩は訊ねた。
すると彼は少し驚いたように目を見開き、それから「利明です。」と答えた。
「昔、隣に住んでたんだけど、覚えてないかな？」彼は少し首をかしげた。
「利明・・・くん。ああ、ちょうどこの間、母と話題にしていた・・・」真歩は信じられないというようにつぶやいた。
「おかあさん、元気かな？なつかしいな・・・」彼が目を細める。
それから真歩の方を見て「おかあさんにも会いたいけど、今日は遅いから、また出直してくるよ。」と言って、くるりと向きを変え、車の方へと向かった。
静かな夜に低いエンジン音が鳴る。

そして彼はいってしまった。

真歩は呆然とその車を見送った。
頬にひやりとした風があたって、慌てて家の中に入る。
そして家の中に入って初めて、今出会った利明君が、先日見た映画の主人公の俳優にそっくりだったと思い至った。

（五）

五

真歩は昨晩、あまり眠れなかった。
何度も桜の木の下で出会った男性を思い返した。
利明。
彼は本当に隣に住んでいたあの彼なのか。
あの瞳。
そして微笑み。
彼だけが背景から少し浮いているようにも感じた。
「上の空。」
真歩は言われてはっと気がついた。
「何考えてるの？」直之が彼女の袖を引っ張った。
今日は真歩の実家近くの物件を見て回っていた。賃貸から新築マンションまで、いろいろと見て回る予定だった。
「ああ、ごめんごめん。」真歩が取り繕う。
「三ＬＤＫですので、お子様がお生まれになっても、十分の広さですよ。」マンションの営業は、満面の笑みを浮かべて熱心に勧める。
真歩は慌ててそのモデルルームに集中した。
確かに広々としていて美しい部屋。もちろん、こんな風に暮らせる訳がないとは思うが、否応無しにも期待が高まる。
大きな液晶テレビ。
美しいソファ。
マンションの立地は異なるけれども、雪のような生活に近づけるような錯覚を覚えた。
一通り部屋を案内され、いよいよ資金繰りの話になった。
簡易テーブルにパイプ椅子。女性がコーヒーを持ってきた。
「家賃程度の返済額で購入できますよ。」営業がしきりに説明する。

直之の顔を見ると、この営業トークに少々疲れてきているようだ。
あまり色よい返事をしたがらない。もちろんこれからの家計に関わってくる問題なので、即決という訳にはいかないけれど、そんなにしぶらなくてもいいのに、と真歩は少し不満に思った。
「ボーナスを返済にあててしまうのは心配なんですよね。」直之が言う。
「おっしゃることはよくわかりますよ。」営業が大きくうなずいた。
「ボーナス返済をなくすとですね、ひと月に訳三万円ほど返済額がアップいたしますね。」営業が申し訳なさそうに言う。
「うーん、そうすると、ちょっと手が出なくなるな。」直之が「そうだよね」というようにこちらを見た。
真歩も直之の言っていることは十分理解していたが、なんとなく悲しい気持ちになっていた。
「ご両親はどのようにおっしゃっていらっしゃいますか？娘息子のためなら援助したいっていう親御さんは多いですよ。」
「うちの両親は慎ましやかに暮らしているから、あまり負担をかけたくないんだ。」直之が言う。
「じゃあ、奥様のご両親は？先ほどのお話では、この近くに住んでいらっしゃるんですよね。」営業がすばらしい笑顔で聞いてきた。
「そうですね・・・聞いてみようかしら。」真歩はつい口にしてしまった。
すると直之の眉間にしわがよった。
「いや、そんなことする必要ないよ。ぼくたちだけで買えない物件は、ぼくたちの身の丈にあってないってことだよ。」
真歩はその言葉に反論できなかった。直之の言ったことは正しい。この物件は身の丈にあってないのだ。
直之はこれで話はおしまいというように資料をしまいだした。営業は「残念」というような顔を笑顔で必死に隠そうとしている。
モデルルームのプレハブを出ると、二人は黙って歩き出した。
真歩はわかっている。直之が正しいということを。

でも、と心の奥底では感じている。
こんな暮らしがしたいと思った。
いつかこんな暮らしができるのだろうかとも。
「やっぱり新築マンションはぼくらには無理だよ。」直之が諭すようにいった。
「うん、わかってる。」真歩も答えた。
「中古マンションを見てみよう。内装をリフォームすれば、きっと満足いく物件になるよ。」直之が彼女の手をとって言った。
「そうね。見てみましょう。」真歩も直之のその真剣な表情に少し穏やかな気持ちになった。
二人は花見がスタートする約束の時間まで、いくつかの物件を見て回った。中古マンションや賃貸アパート。でも、あんなに立派で美しい新築のマンションを見た後では、どれもこれも色あせて見えてしまう。
けれど直之は冷静に、どの物件も懸命に見て回っていた。そんな彼を見ると、真歩はがっかりする気持ちを顔に出さないように気を使った。

上野公園に到着すると、ものすごい人ごみだった。桜の木の下にビニールシートを引いて、すでに完全に酔っぱらっている花見客、おしゃべりに夢中の女の子達の集団、そして直之と真歩のように、手をつなぎ、可憐な花を見上げながら歩くカップルたち。一年のうちで今の時期が一番、この公園が混むというのは、事実だった。
直之が携帯で連絡をとりながら、友人達がいる場所を探した。あまりにもたくさんの人がいるため、とてもじゃないが見つけ出せないとうんざりしていると、遠くの方から二人を呼ぶ声が聞こえた。
大学時代のサークル仲間は、噴水近くの立派な桜の木の下に、ちゃんと場所を確保していた。サークルに所属していたメンバーの約半数ほどが集まっている。この年齢にしては集まった方なのではないだろうか。メンバーの顔を見ると、やはり独身組が多い。家族を持

つ友達は、ほとんどいなかった。
「やあ、久しぶり！結婚おめでとう。」このイベントの幹事を引き受けた、ムードメーカーの友人が、二人に声をかけた。するとそれに続くように、居合わせたみなからも、口々に「おめでとう」と声が上がった。
「ありがとう、なんか照れるな。」直之と真歩はつないでいた手を離し、なんとなくばらばらに腰をおろした。
それからもぱらぱらと、友人たちが集まってくる。いつが宴会のスタートということはなく、いつのまにか皆ビールを開け始めた。
満開の桜は本当に美しかった。ライトアップされた花びらは、夜空に白く浮き上がる。
「こんなにうるさくなければ、もっと観賞できたのに。」真歩がちいさくつぶやくと、隣に座っていた友人が「ばかね、そういうのは上野公園じゃできないのよ。」といって、真歩の紙コップにビールを注ぎ足した。
「ビールは身体に残るから、苦手なんだよね。」真歩はなみなみと注ごうとする彼女を、手で制しながら言った。
「花見に来て飲まないなんて、どうかしてるわよ。」と言って、彼女は強引に注ごうとする。すでに少し酔っているのかもしれない。
「今日、雪は？」真歩はちびちびと紙コップに口を付けながら、訊ねた。
「雪はね、なんかちょっとだけ顔を出すって言ってたわ。」
「そうなの？」
「ほら、忙しいみたいだしね。今や女社長ですもん。」彼女は足をのばした。シートから足がはみ出てしまうのもおかまいなしだ。
「ほら、来た！」彼女が声を上げた。すると遠くから、花見には似つかわしくないような、きっちりとしたスーツを着た雪が歩いてくるのが見えた。
「ごめん、遅くなった。でも、まだ仕事があるから、ちょっとだけしかいられないんだけど。」雪は片手で謝るようなポーズを見せ、

それから真歩の隣に座り込んだ。
甘い香水の香り。
「真歩、ビール飲んでるの？珍しいわね。」
「うん、そう。これしかないんだって。わたし苦手だから、そろそろ頭がくらくらしてきた。」真歩はおどけて言ったが、事実アルコールが全身を駆け回り、早くもギブアップの予感がしていた。
「ちょっと大丈夫？本当に調子にのるんだから。」雪は真歩の手から紙コップを取り上げた。
「ウーロン茶持ってきてあげる。」そういって、彼女はさっと立ち上がり、すぐに持ってきてくれた。
真歩はそんな彼女の姿を、羨望のまなざしで見つめた。
美しく、女性らしく、そして社会でも成功している。
「いいなあ、雪。」真歩は酔いも手伝って、いつもよりもストレートにうらやましいと表現した。
「何が？」雪は完璧な笑顔で返す。
「何でも持ってる。」真歩は少し口を尖らせた。
「そんなことないでしょ。持ってないものたくさんあるわ。」雪が軽く笑いながら答えた。
「ううん、持ってるよ。雪みたいになりたかったな、わたし。」
「何言ってるの？真歩は今十分に幸せじゃない。」
「幸せだけど、そうね、幸せだな。」
「ほら、でしょ。わたしはもう一生結婚なんかできないだろうな。」
「ええ？そんなことないわよ。こんなにきれいで魅力的で、男性がほっとかないわ。雪の結婚式で友人のスピーチをするのが夢なんだから、そんなことといわないで。」
雪は視線を頭上の桜に移す。
「きれいだわ。」と雪はつぶやいた。
彼女が幸せではしゃいでいるというところは、見たことがなかった。いつも静かで安定している。雪がはしゃいでいるところも見てみたい、桜を愛でる雪を見て、真歩はそう思った。

「そろそろいかなくちゃ。」雪はビール一杯を飲みきったところで、名残惜しそうに立ち上がった。
「もういっちゃうの？」
「仕事を抜け出してきたから。それなのにつられてビールなんて飲んじゃった。」雪はにこっと真歩に笑いかけた。
「じゃあ、またね。気をつけて。」真歩は手をあげた。
「うん、また。」そういうと彼女は直之のところまで歩き、何やら耳打ちをした。直之が軽くうなずくと、雪は皆に「じゃあ、また。楽しんで。」と軽く手をあげ、帰っていった。
去っていく後ろ姿は、すでに仕事のモードに入ってるかのように、きりりとしたオーラが放たれている。
「やっぱり彼女は素敵。」真歩は眠気に襲われながらも、そんな風に思った。
そこへ、直之がビールを片手に、真歩の隣に移動してきた。
「雪が真歩が酔っぱらってるから、ついていてやれって言って。」
直之は叱られた子供のように、申し訳なさそうに真歩を見た。
「大げさな。それほど酔ってないわ。」真歩はそう言ったものの、すでに座って身体を支えているのもしんどくなってきていた。
「いいよ、横になって。いるから、ここに。」直之がそういうと、真歩はその言葉に甘えて直之の膝に寄り添うように横になった。
ぱらぱらと小さな花びらが舞い落ちるのが見える。ふと、昨日の光景がよみがえった。
あれは現実じゃなかったのかもしれない。
真歩は、ぼんやりした頭でそんな風に考えた。
「眠いならいいよ、寝ても。」直之が真歩の髪をなぜた。
真歩は静かに目を閉じる。
直之の大きな手が、真歩の頬にあてられる。
「愛しい。」真歩はその手の暖かさを感じて、そう強く思った。

（六）

六

家に帰ると、利明がいた。

リビングのソファに礼儀正しく腰掛けて、母となんだか楽しそうに話している。真歩はあまりのことにしばらく立ち尽くしてしまった。今日真歩は時間を持て余し、近所のショッピングセンターにあるタイムマッサージに行っていた。結婚したらこんなちょっとしたリラクゼーションも、経済的な理由からできなくなる。そう思うと今のうちに楽しんでおこうという気になったのだった。

部屋は西日でほんのりと紅い。利明の頬には落ち行く太陽の陰がうつり、その頬骨を際立たせていた。

「あら、真歩！おかえりー。」母がいつもより何トーンも上の声で話しかけた。明らかに母は浮き足立っているようだ。

「お邪魔しています。」利明は真歩の方をみると、まるで雑誌の表紙を飾るかのような笑みを浮かべて挨拶をした。

「先日は突然声をかけてしまって、びっくりさせてしまったでしょう。すいませんでした。」彼は母の方を「そうなんですよ」というように見やった。

「あれ、真歩、あんた前に利明君に会ってたの？何にも言ってなかったじゃない。」母は真歩を責めるように眉間にしわを寄せた。

「うん、この間帰ったときにちょっと・・・」真歩は母の近くの床に座り込んだ。

「ちょっと、覚えてるでしょ、利明君。ついこの間話してたもんね。まさかねえ、こんな風に成長してるなんて、思っても見なかったよ。」母はまるで自分の手柄かのように誇らしげに話した。

「昔はお世話になりました。学校から帰ると必ずこちらのおうちに

寄せてもらって。お母さんの作ったお菓子、おいしかったな。とくにプリンが大好きだった。」利明もうれしそうに言った。
「まあ、うれしいこと言ってくれて。あ、コーヒーのおかわり持ってこようか？」母が席を立とうとしたが、利明が右手を上げて制止した。
「いや、もう今日は帰りますから。」
「あれ、そうなの？夕飯でも一緒にって思ったんだけど。」母は心底がっかりしたようにつぶやいた。
「ぼくもそうしたいんですけど、夜から仕事が入っていて。」利明も残念そうに答えながら、立ち上がった。明らかに上質とわかるスプリングコートを手に取る。
「今日はご連絡もせずすみませんでした。それに突然お邪魔したにも関わらず、ご親切にしていただいて、ありがとうございました。本当になつかしかった。また来てもいいですか？」利明は帽子をかぶり前髪をしまいこんだ。
「もちろんよ！大歓迎。」母が満面の笑みを浮かべる。
「まだ日が落ちる前に、少し時間があるかな？ちょっと小学校にも寄っていきたいんですよね。」利明が言った。「でも、どうやって学校まで行ったかな？忘れちゃったな。」利明がもしよければ教えてほしいというように真歩に視線を送る。
「真歩、あんた、案内してやんなさい。」母がそれを察して言った。
「え、わたし？ああ、うん。いいけど。」真歩は少しどぎまぎしながら答えた。
「ではお邪魔しました。ありがとうございました。」玄関で靴を履き終えると、利明が優しい声音で言った。扉をあける。
真歩も後に続いた。
そして二人で並んで歩き出した。

小学校まではそう遠くはない。大人の足で十分程度だ。真歩は信じられない気持ちで隣の男性を見上げる。背は直之より高い。帽子で

顔を半ば隠しているが、その口元が微笑んでいるのがわかる。
「真歩さん、変わらないね。それからお母さんも。」利明が言った。
「うん、ごめんなさい、母がうるさくって。」真歩は答えた。
「川風の香りも昔のままだ。ほんとうに懐かしいな。ぼくはここに住んでいたんだな。」利明は帽子を少しあげ、目を細めて土手を見上げた。
このあたりは川の水面よりも地面が下だ。大雨のとき、みるみるうちにあがる水位を二階の窓から見て、避難することを考えたことは一度や二度ではない。
「今日は車で来てないんですか？」歩いている彼を見て、真歩はふと問いかけた。
「うん、電車できた。」
「それって、大丈夫なんですか？」
「大丈夫って？」
「えっと、ばれてパニックになったりとか。」
利明は少し笑って「ぼくはそんなに人気者でもないよ。」と答えた。
「大丈夫だよ、東京は。誰かがぼくをみつけても、声をあげたりしない。」そして真歩をじっと見つめて「ずっと敬語だね。昔みたいに話がしたいよ。」と言った。
真歩は利明のその大きな美しい瞳に思わず見入ってしまった。
心臓が高鳴る。
真歩は動揺した。
二人は並んでしばらく無言で歩いた。
真歩はどんな風に彼と会話をしていいのか、皆目見当がつかなかった。
かつて、楽しく一緒に遊んでいたなんて、信じられない。
頭がおかしくなりそうだ。
小学校が見えてきた。自分たちが小さかったころは大きく見えた校庭も、今みるととても狭い。校舎も思ったより小さい。なんだか不思議な感覚。

真歩もこれが卒業後はじめての訪問だ。もちろん、前を何度も通り過ぎてはいたけれど。
校庭は解放中だった。幾人かの高学年の少年達が、サッカーに興じていた。そろそろ日も暮れてくる。大半の子供達は家路についたようだ。
利明は迷うことなく校庭に入り、校舎入り口に続く石畳を進んだ。
真歩も後に続く。体育館の脇を抜け、うさぎを飼っている小屋を通り過ぎ、鯉が泳ぐ池を眺めながら歩いた。確かにかつてここに通っていた。すべて見覚えのある場所。
エントランスに到着すると、その階段に腰掛けた。太陽の最後の光がもう少しで消えていく。
真歩は利明の顔を見て、そしてはっとした。
泣いているように見えたのだ。
でも気のせいかもしれない。
利明は先ほどと変わらない声で真歩に話しかけた。
「ぼくはここを卒業したかったよ。」
「なぜ引っ越し・・・したの？」真歩は勇気をもって敬語をやめた。彼はうれしそうに彼女を見やると「離婚したんだ、両親が。」と答えた。
「父には他に女性がいてね。母とはいさかいがたえなかった。両親のけんかがはじまると、ぼくは恐ろしくっていつも自分の部屋に閉じこもった。そして窓から真歩んちを見てたよ。うらやましかった。」
真歩はじっと聞いていた。
「ぼくは母親の実家のほうに引っ越した。父はね、恥ずかしい話なんだけれど、会社のお金を着服していたようで、とても肩身の狭い思いをしながら引っ越したんだ。だから挨拶もしにいけなかった。根掘り葉掘り聞かれるのがいやだったみたいでね。真歩んちにはお世話になったから、挨拶にいきたかったんだけど。」
「知らなかった。そうだったの・・・」真歩は初めて聞く真実に少

なからずショックを受けた。あの頃利明がそんな問題を抱えているなんて、みじんも感じなかった。しょうがないことではあるけれど、自分のその幼さに今更ながら腹がたった。
「ごめんなさい、ちっとも気づかなくて。」真歩が謝ると利明はびっくりしたように顔をあげた。
「いいんだよ、謝らないで。これはうちの話だから。」
風が強くなりはじめ、砂埃が頬にあたる。
日はとっくに落ちていた。
「さあ、行かないと。遅刻はしたくないんだ。」利明が立ち上がり、真歩の手を取り立ち上がるのを助けた。
もときた石畳を戻っていく。暗くなったので、足下がよく見えない。真歩は彼の顔を見上げたが、やはり暗くて表情はわからなかった。
「結婚するんだって？」突然利明が言った。
真歩は心臓が止まるかと思うほどびくっとした。

知られたくなかったのだ。

「お母さんがうれしそうに話してたよ。」
小学校を出ると、街灯がつき始めていた。
彼は街灯の下で立ち止まると彼女に向き直った。
「おめでとう。よかったね。」彼はやはり完璧な表情で笑いかけた。
「・・・ありがとう。」真歩は思わず目をそらしていた。
「携帯の連絡先を教えてくれる？」彼が言う。
「結婚するなら、そのお祝いもさせてほしいから。」彼が続ける。
真歩は言われるがままに自分の携帯番号とメールアドレスを教えた。
「じゃあ、連絡するから。お祝い何がいいか、考えといて。」彼は快活に言うと、片手を軽くあげて「今日はどうもありがとう。またね。」と言って、足早に去っていった。
彼の姿があっというまに小さくなっていく。
自分自身が揺さぶられている気がする。

真歩は自分の感情に戸惑いながらも、大きくなってくる不安を必死に押さえつけようとしていた。

（七）

七

もう何回、携帯電話の開閉を繰り返しただろう。
昨日の夜からずっと。
数えきれないほど。
真歩はリビングのソファに寝転んで、昼下がりの帯ドラマをぼんやりと見ていた。
仕事をしていた時には、こんな時間の過ごし方は考えられなかった。
昼ドラを見るなんてこともできなかった。四月からスタートした新シリーズを、真歩は仕事を辞めたからと、意気揚々と初回から見始めたが、すぐにどうでもよくなった。
誰かと誰かが愛し合って、浮気して、憎み合って、それで死んじゃったりするんでしょ。
なんとなく話の行方が読めてしまって、昼ドラは彼女の時間つぶしになってしまった。
今日は晴天。窓から見える空は、とても青く穏やかそうだ。
真歩は再び携帯を開いて、何も着信がないことを改めて確認すると、閉じて彼女のおなかの上にのせた。
足でクッションをつついたり、蹴ったりして、横目でテレビを見ながら、ぼんやりと過ごす。
すると、利明が出演するコマーシャルが流れた。
新車のＣＭ。若いけれどある程度のステイタスのある人々が好むような車種。
車を運転する彼は、昨日この場にいた彼とは同じ顔ではあるけれど、どこかやはりちがう。どちらも真歩にとって現実味がなかった。
母がキッチンから飛んで出てくる。
「ほら、利明くん！」エプロンで手を拭きながら、真歩の側に座り

こみ、興奮気味にしゃべる。
「わかってるわよ。」真歩は母のこの浮き足立った感じが気に入らない。
「いやー、かっこよかったね。子供のころもきれいな顔した男の子だなあ、なんて思ってたけど、大人になったら、あんなふうに色気がでるもんなんだね。」
「色気って・・・ちょっと浮かれ過ぎよ、おかあさん。」真歩が言う。
「あら、浮かれたっていいじゃない。あの利明くんが、立派に成長してうちに来てくれたって、すごくうれしいことなのよ！」母はそれからちょっと考えて「名前を見てもぜんぜん気がつかなかった、芸名だったのね。」と言った。
他の数多のＣＭが流れていく。その間も母は上機嫌でまくしたてた。真歩は母の上気したその顔を見ながら、訊ねるともなく口に出した。
「また来るって言ってたけど、来るかな？」
母はびっくりしたように真歩の方を向き、当然というように言った。
「来ないわよ、きっと。ああいうのを社交辞令っていうの！」
「そっか、そうだよね。」真歩はわかっていたというように頷いた。
「ああ！サインもらっときゃよかった。」母がため息をつく。
「いやね、せっかくプライベートの時間をさいて来てくれたのに、そんなお願いしちゃ悪いかなあ、なんて思って遠慮しちゃったんだけど、やっぱりもらっときゃよかった。ついでに写真も。」そういいながら母が立ち上がった。
「あんた、そこで一日中ごろごろしてるつもり？」
「んー、なんだかやる気がでなくて・・・」真歩がクッションを抱えながらつぶやく。
「じゃあ、買い物にいってきてよ。そこでごろごろされちゃ、目障りで仕方がないわ。」
「んー、わかった・・・じゃあ、いくか・・・」真歩は怠けすぎてけだるい身体をやっとのことで起き上がらせた。

あたたかな日差しのなか、ゆっくりと駅前の商店街をゆく。
割と小さな商店が営業を続けている。
大きなドラッグストアやファミリーレストランなどは増えたが、基本的には昔と変わらない風景だ。
真歩はスーパーに行く前に、本屋になんとなく立ち寄った。いや、なんとなくという言い方は間違っている。彼女は気づきたくなかったが、目的があった。
ひっぱられるように、雑誌コーナーへと向かう。
そこで利明が出ている記事すべてを、真歩は片っ端から読みだした。どの利明も、昨日会った彼であって、彼ではない。
不思議な感覚が彼女を襲った。
そしてあらかた読み終わると、真歩はため息をついて本屋を後にした。
雪に相談したかった。
でも相談って何を？全部自分の感情の問題なのに。
真歩は携帯を再び取り出し、また確認して閉じた。
連絡は来ないでほしい。
連絡が来ないのであれば、真歩は自分の人生と向き合える。
今は母と同じく、浮ついているだけ。
そう思っても、彼女の手から携帯が離れることはなかった。

スーパーで買い物をする。
今日は天ぷらかな？そんなことを思いながら、かごを手にとった。
大きなチェーンのスーパーマーケット。ここはほんの三年前にできた。その前は地元に根付く小さめのスーパーだった。
すべての商品が美しく並べられている。瑞々しいブロッコリー。形のそろったトマト。値段を見ながら「割と高いな。」と改めて思った。これから自分が家計を考えなくてはならない。真歩はなんとな

く不安になってきた。
「直之のお給料だけでやっていけるかしら？」
真歩は、一人っ子ということもあって、あまり我慢をしないで成長したと、自分で自覚していた。食卓が豪華な訳ではなかったが、でも決して質素ではなかった。
今更ながら、とてもありがたい環境だったと、両親に感謝したい気持ちだった。
ビニール袋を両手に、元来た道を戻る。携帯を確認したいが、手が埋まってるのでできない。
「連絡なんかきてないのに。」そう思うと、真歩は自分が本当に滑稽なような気がしてきた。
利明。
彼は真歩の幼なじみらしい。
「らしい。」というのは、言葉どおりで、真歩にはいっさいその感覚がなかった。あの写真の男の子。確かに彼を記憶している。仲良くしていたことも覚えてる。しかし、彼が成長して、今の利明になったとは、とても思えなかった。それほど利明は非現実的だった。
そこにいるのに、いるように思えない。現実の人間ではない。
呼吸をし、
食事をし、
そして誰かを愛する。
そのはずなのに、ぴんとこない自分がいた。
空を見上げる。
真っ白な雲が、ひとつ、ふたつ。
緩やかな風に押されて、ゆっくりと動いている。
土手沿いの道を歩く。
なじみのある道。
毎日歩く道。
でも結婚したら、この土地から離れるんだ。
真歩は少し感傷的な気持ちになり、ほとんど土に埋もれてしまった

コンクリートの階段を上り、土手の上にでた。
大きな川が横たわる。
割と急な土手の坂から、川までの平地には、草野球のためのベースがぽつぽつと置かれていた。今は犬の散歩をするお年寄りしかいないが、週末になると地元の野球少年達がここに集う。その練習につきあう大人達の声と、木製バットにボールのあたる固い響きは、真歩に染み付いた情景だ。
土手に腰を下ろした。
ひやりとした草の感触が、下から伝わってくる。
ふとみると、緑色のクローバーが生えている。そろそろシロツメクサと言われる、白い小さな花が咲いてくるのだろう、そう思って、真歩はなんとなく思い出した。

真歩は家から段ボールを二つもって、土手を駆け上がった。隣の家の玄関からは、利明が同様に走り出てくる。
利明は白地のポロシャツにネイビーのズボン。少し裾を折り返している。そこから細いくるぶしがちらりと見える。真歩はレースのついた薄桃色のシャツに、膝までのデニムをはいている。
二人は共に笑顔で、天気のいいこの日を全力で遊ぼうとしていた。
「持ってきたよ、段ボール。」真歩が利明に段ボールを一つ投げる。受け取った利明が早速お尻の下にひいて、土手をぼくが一番とばかりに滑り降りていく。利明はバランスよく、最後まで倒れず滑りきった。利明は振り返り、見上げ、土手の上にまだ一人立っている真歩に対して、勝利宣言のように片手を上げた。彼の黒い髪は風に吹かれ、その聡明そうな額をはたはたと撫でている。その表情は満面の笑みだ。
真歩は段ボールをしくと、一気に土手を滑り降りた。段ボールが草をこすると、緑の香りが匂い立つ。しかし勢い良くおりすぎたのか、真歩は途中で段ボールから投げ出されてしまった。坂をごろごろと

転がり落ちていく。そしてやっと体勢を立て直すと、真歩はおなかを抱えて笑い出した。視界に利明が笑っているのが入る。
二人で顔を見合わせて、また笑いだした。
「もう一度！」
「よし！」
二人は段ボールを手に、再び坂を駆け上がる。
何度か坂を猛スピードで滑りおりた。利明はいつもうまい。転げることはなかったが、真歩が無事坂の下まで滑り降りることができたのは、数えるほどだった。
「真歩、下手だな。」利明が言う。
「下手じゃないよ。」真歩がふくれて言う。
それから二人は、野球場を駆け出す。
川風が気持ちいい。
利明の足はとても早い。どんどん真歩を離していく。
でも時々真歩がついて来れているか振り返る。
そして足を緩める。
その場で少し足踏み。
真歩が追いつきそうになると、また走り出す。
真歩は楽しかった。こうやって利明と過ごす時間が、とても大切に思えた。
利明とは、学校では他クラスだ。廊下ですれ違うときも、挨拶さえしない。なぜか学校では他人だった。でも、一度家に帰ってくると、利明は真歩の暮らしに欠かせない大切な友達になった。
ひとしきり走り回った後、二人は土手に腰を下ろした。
「あ。」利明が声をあげる。
「何？」真歩が覗き込んだ。
そこに、ちいさなシロツメクサが一つ咲いていた。クローバーが群生するその真ん中に一本だけ。頼りなげな茎の先に、小さな花が開いていた。
「今年最初の花だ。」利明が言った。

周りを見回すと、これから咲こうかというつぼみがいくつもあった。
「真歩にあげようか。」利明はその茎に手を伸ばす。
「あ、待って！」真歩は声を上げた。
利明は「なんで？」というように真歩を振り返る。
「かわいそうよ、とっちゃうのは。」真歩は利明に強く主張した。
「そのままにしておいてあげようよ。」
利明は「そうか」と小さく頷くと、真歩に向かって「じゃあ、明日また見に来よう。」と言った。
二人は大事な約束をしたような気持ちになり、互いに微笑み合った。
「ああ、のどかわいた。なんか飲みにいこう。」真歩は腰をあげた。
「冷蔵庫にバヤリースが入ってたよ。あとお母さんが、ドーナツ作るって言ってた。」
「よし、行こう！」利明も立つ。
そして二人は勢い良く土手を駆け下り、真歩の家の玄関まで走った。

そうだ、そういえば。二人で翌日も見に行ったんだ。そうしたら、一つだけではなく、何十と咲いていて、どれが二人のシロツメクサかわからなくなっていたんだ。
真歩はそっとクローバーに手を伸ばす。そのかわいらしい緑の葉をそっとなでた。
利明は確かにここにいたんだ。
それを思い出して、真歩は少しほっとした。

（八）

八

連絡はこない。
あれから十日ほど経とうとしていた。
真歩は連絡がないことに安堵しながらも、沈みきった気持ちをどうすることもできなかった。
直之とは花見から一度も会っていなかった。やはり、新入社員が配属される四月は忙しいということで、結婚準備もすべて棚上げとなっている。二人で見たモデルルームには、「完売御礼」の看板が出ていた。
桜の花びらはすべて落ち、コンクリートの上を跳ね周り、その命を終わらせた。枝にはすでに緑の小さな葉が見え始めている。空気には緑のにおいが強く香る。
真歩は、利明と再会した時から胸の真ん中でうずいているこの感情を整理できずにいた。十日たってもなお、その感情をおさめることができない。むしろどんどんと彼女自身を浸食していくようだった。
直之と会わずにいて、彼女はほっとしていた。
そこに携帯から着信の音楽が流れ出した。自室にいた真歩ははっとして携帯を手にとる。
心臓が大きく跳ねた。
が、その着信名をみて、緊張が一気にとけた。
電話に出ると雪からだった。
「こんちわ、花嫁！」雪の美しい声が携帯から響く。彼女の声はいつも少し大きめだ。でも決して耳障りなものではない。
「こんちわー・・・」真歩は落胆を隠そうともせず、返答した。
「あれ？どうしたの、がっかりした声だしちゃって。」雪は敏感に反応する。

「うん・・・」真歩が言いよどむ。
「園田君からの電話を待ってるの？すいませんね、わたしで。」彼女がからかい半分で言う。
「別に待ってないんだけど・・・うーん、まあ、また今度会ったとき話すわ。」真歩はまだ雪に話すかどうか決めかねていた。
「なによ？マリッジブルー？幸せの絶頂で、鬱になるなんて、本当にあるのねえ。まあ、わたしはおそらく一生経験することもないでしょうがね。」と自虐的に言った。
「ああ、それで本題なんだけど。」と言って、雪は自分の用件を話だした。
「えりちゃんのところにね、赤ちゃんがうまれたんだって。男の子。巨大児らしいよ。笑っちゃうわよね、えりちゃん、あんなにちっちゃいのに。旦那様が結構体格いいから、その血が強くでたのかな？」とちょっと笑う。
「それでね、お祝いを贈らない？と思って電話したの。」
「そうね、お祝い何がいいかなあ？」
「うーん、初めての子供だから、いろいろ他からもらうだろうしね。雪がしばらく考える。
「オーガニックコットンの何かはどうかしら？子持ちのスタッフに聞いたら、もらってうれしかったらしいの。」
「オーガニックコットン。確かによさそうね。」真歩が答える。
「じゃあ、専門店がサロンの近くにあるから、ちょっとよって見てみようかしら。もし真歩に時間があれば、一緒にみて、そのあとランチでもどう？あんまり長い時間はとれないんだけど、マリッジブルーの原因ぐらい聞いてあげられるから。」雪が言った。
「・・・うん、じゃあ、そうしようかな。」真歩はまだ話すかどうか決めかねていたけれど、なんとなくそう返事をしていた。
そして二人は日時を約束して、電話を切った。
雪に話しても解決することではない。真歩は十分にわかっていた。が、雪がそうやって申し出てくれる気遣いを、とてもありがたいと

思った。
そこに、階下から真歩を呼ぶ母の声がした。
「なにー？」真歩は大声で答える。
「あんた暇なら、和室の布団を出しといてー。」母が返す。
真歩はよいしょっと腰を上げ、携帯を片手に下におりていった。
今日は真歩のおじ夫婦が東京にでてくるので、和室を整えておかなくてはならないのだ。おじ夫婦は九州に住んでいるのだが、こちらで友人の結婚式があるということで、前日真歩の家に泊まることになったのだ。
めんどうくさいと思いながらも、和室に向かう。
和室は北向きなのでいつでも暗い。
ここの部屋だけは、どの季節にはいっても冷やっとする。
真歩はさっさとすませようと、押し入れを開けた。
中には敷き布団と掛け布団が詰め込まれている。
真歩は力を込めてふとんを引っ張りだした、が、シーツがどこにあるのかわからない。
彼女はかがんで押し入れ下に身体を差し入れ、暗闇の中に手を伸ばした。

そこで真歩の脳裏に、記憶の一瞬が突如浮かんだ。
本当に一瞬だけ。
でもそれは鮮明だった。

そして真歩は身体が熱くなった。

「じゃあ、ちょっとおつかいにいってくるから、留守番を頼むわね。」母が快活に言いおいて、真歩たち二人は家に残された。
ダイニングの椅子に並んで座り、それぞれのお皿に盛られたおやつを食べる。二人ともまだ身長がとどかず、椅子に浅く腰掛けている。

たまに足をぷらぷらさせるのはチェックのワンピースを着た真歩のほうだ。
最後のチョコレートを口に放り込むと、利明は「行こう」と言って席をたった。真歩もあわてて席を立つ。二人はこれから家中を探検するのだ。
探検といっても、すみずみまで知り尽くしたこの家。懐中電灯を片手に回るのは初めてではなかったが、それでも「探検」と銘打つと、いつもの家があっというまに異空間となる。
午後三時半頃。初夏といえども、そろそろ廊下や北側の和室は薄暗くなってくるころだ。利明は懐中電灯を右手にもちながら、そろりそろりと和室の中に入っていく。真歩も利明のうなじをみながら、後に続いた。
障子が閉めてある和室は薄暗く、懐中電灯の光が右左に動くのがよく見えた。
真歩は利明の横顔を眺める。頬はうっすらと上気し、笑顔だった。利明の顔を見るとうれしかった。真歩はここ何週間か、徐々に利明とともに過ごすこの時間を特別なものとしてとらえるようになっていた。なぜかはわからない。とにかく利明が家にくるのは胸が高鳴った。
利明が真歩を手招きして、もったいぶったような手つきで押し入れのふすまをそっと開けた。
下の段には布団がいっぱいつめられている。利明は土をかき出すかのように大げさに布団を引っ張りだすと、その山を乗り越えて押し入れの中に入っていった。「おいでよ。」と声をかけられて、真歩も洞窟のようなくらい穴の中に入っていった。
北向きの部屋とはいえ、押し入れの中に子供が二人、布団と一緒に入り込むと、暑苦しい。それでも利明は押し入れの戸を閉め切った。穴蔵の中でしばし、懐中電灯をつけたり消したりしながら、遊びだす。
そうするうちに、二人ともだんだんと汗ばんできた。

それでもこの楽しい別世界をまだ出る気にはなれない。
「もっと奥を探検しよう。」利明が懐中電灯で、布団が詰まった奥の方を照らす。
真歩は身体の向きをかえ、その光の先に手を触れようと、積み上がった布団に身を乗り出した。
ワンピースがずり上がり、真歩のまっすぐで細い太ももが、利明の前に現れる。真歩はそれに気づいて、慌ててスカートを引っぱり下げ、利明の方に向き直った。
利明は真歩が想像していたよりもずっと近くにいた。汗ばんだ腕と腕がふれあう。
そして利明は懐中電灯の光を消した。

狭い空間の中で静かな緊張感が漂った。二人は否応無しにふれあっている。肌が触った箇所が、いままでに感じたことのないくらい熱い気がした。
利明が真歩の太ももに手をおいた。徐々にスカートをずらしていく。真歩はどうしたらいいのかわからなかったが、自分の中心部分で脈打つものを感じていた。
利明の手がとうとう彼女の下着に触れたとき、利明が真歩に身を乗り出した。
狭い中での幼いぎこちない抱擁。遠慮がちに回した真歩の手に、利明の汗を感じた。そして身体中に心臓が鳴り響いている。息苦しい。
利明はしばらく彼女の下着の上に手をおき、微動だにしなかったが、意を決したように下着を下にずらした。真歩は大きな抵抗も感じたが、じっと動かずにいた。利明は下着を膝までおろすと、今度はワンピースのファスナーに手をかけた。されるがままにワンピースを脱がされる。中途半端に衣服が身体にまとわりついた状態で、二人は再び抱き合った。
「とても悪いことをしている。」真歩はそう思った。それと同時に、抵抗できない衝動が身体の奥底からわき上がってくる。そんなこと

は初めてだった。
「これ以上のことがある。」真歩は利明のぎこちない手を感じながら思う。でもそれが何かはわからない。ここから先へと進みたいと身体が言っているのに、どうしたらいいのかわからなかった。
利明もそれは同じようで、二人は暗くて狭いこの空間で、抱き合い、ふれあって、もどかしい気持ちだけが高まっていった。
そして知っている愛情表現の一つとして、唇をそっと重ねた。

その記憶に頭だけでなく身体中を支配されていたが、真歩はとりあえず必死に布団を二組しいた。そして終わると母に声も駆けずに、階段を駆け上がり部屋に飛び込んだ。
ベッドに勢い良く転がる。枕を抱きしめて、身体中を駆け巡る血流をなんとかおさめようと深呼吸したが、まったく効果はなかった。それどころか、何度も記憶を頭で再生しているうちに、どんどんとその輪郭がはっきりし、声や熱さ、匂いなどを伴って、よりリアルに肌に感じるようになっていた。

彼の髪の毛はシャンプーと汗の匂い。
汗ばんだ肌はべたべたしたけれど、不快ではない。
そして彼の唇はミルクチョコレートの味がした。

唇を重ねたとき、玄関の鍵が開く音がした。二人は慌てて衣服を整え、押し入れから這い出てきた。汗が一瞬で冷たくなる。それからそのまま、何事もなかったように一日が終わったのだ。
「それからどうしたんだろう？」真歩は思い出そうとした。記憶に残っているのはこのときだけ。これ以上のことはなかったのだ。ただ二人の間に多少の緊張感は残ったかもしれない。覚えている訳ではないが、それは想像できた。

あれが自分の初めての衝動。
そう思うと、真歩は再び身体がほてってきた。

直之と初めて身体を重ねたとき、真歩は初めて性の歓びを知った。
それまでの行為は男性の一方的なものであって、決して楽しいことではなかった。求められるから、なんとなく応える。そういうものだと思っていた。しかし直之を知って、考えが変わった。
直之は行為に心を尽くした。どうすれば真歩が気持ちよく幸せになれるのかを、一番に考えてくれているように感じたのだ。彼に触れられると「愛されている」と実感できる。
でも今真歩の中にわき起こるこの堪え難い欲求は、直之が受け入れてくれるものではない。そう思うと、とてつもない罪悪感が彼女を襲った。
そこに突然携帯の着信がなった。
真歩ははっと身を起こして、携帯を手に取る。
直之からだった。
落胆と、そして不安。
今電話に出て、普通でいられるだろうか。
しかし彼女は直之を無視することができなかった。
久しぶりに聞く直之の声はいつもと変わらず穏やかで優しい。彼がしばらくとても忙しかったので、メールでしかやり取りしていなかったのだ。
「今何してる？」直之が聞く。
「うん・・家でいろいろと。」真歩が当たり障りのないことを返答する。
「ごめんね、ほったらかしにして。結婚のこととか、引っ越しのこととか、まだぜんぜん決まってないのに。全部真歩に預けっぱなしにしちゃって、ほんとごめん。」
「ううん、仕事が忙しいのは仕方がないことだもの。」真歩は直之の気遣いに心乱れた。「次はいつ休み？」明るい声で訊ねる。

「うん、いつかな。がんばって調整するよ。やっぱり四月は忙しくてね。」直之がため息をつく。「早く真歩に会いたいよ。」
「うん・・・」
彼はいつも誠実で穏やか。こんな人は今までみたことがなかった。声を荒げたこともなかったし、いつも真歩の意見を尊重した。彼を愛しいと思う、その気持ちには変わりなかった。現に携帯から聞こえる彼の声に、胸の奥がじんとするような感情が生まれる。彼と結婚することは、真歩にとって決して誤った選択ではないのだ。
「新婚旅行はどうしようか。決めなくちゃいけないことがいっぱいだね。」直之が電話口で笑っている。「どこがいい？」
「そうね・・・遺跡めぐりなんかも楽しいかも。」真歩も旅行に思いを馳せる。
「いいね、ピラミッドとか、一生に一度は見てみたい。」直之も答えた。
「でも、きれいな海っていうのもいいかな。ただのんびりとするというか。」
「ああ、それもいいね。リゾートで日常を忘れるのもいい。」直之があわせる。
「直之はどこに行きたい？」
「うーん、たくさんあるけど・・・イタリアとかも魅力的だな。でも真歩の行きたいところに行こうよ。新婚旅行は一生に一度だよ。」
「でも迷っちゃうな。行きたいところたくさんありすぎて。」
「じゃあ、ぼくが定年退職したら、二人で世界中を回ろう。時間はたくさんある。」
「そうね。それならお金たくさんためておかなくちゃ。」真歩が笑いながら言った。
彼と共に歩む人生。
真歩はいとも簡単にそれを思い浮かべることができた。年を取った二人が、ガイドブック片手に旅行に出る。もちろん世界中というわけにはいかない。でも一度や二度、そんな経験もできるだろう。

それが自分の現実なのだ。真歩はそう思った。

(九)

九

雪との待ち合わせの時間まで、真歩はひとり広尾の商店街をぶらぶらと歩いた。ここは高級住宅街ではあるけれども、働く人々の顔ぶれは、真歩の近所の人たちと変わらないように思った。

利明からの連絡はこないでほしい。

真歩は一層強く思うようになった。直之とのこれからの人生を、穏やかに過ごしたい。直之を失うことなど考えられない。真歩は彼を愛していると、愛したいと心から望んだ。

暖かさは日に日に増してくる。六月末に控えている結婚式も徐々に現実味を帯びてくる。「わたしは彼と結婚する。」真歩は何度も心に向かってつぶやいた。

ふらりとコーヒーショップに立ち寄った。ローストした豆の香りが鼻孔をくすぐる。本当に甘い一杯がほしい、と考えて、そのシーズンおすすめのフレーバーコーヒーをオーダーした。ガラスに面した一人掛けの椅子に腰掛けて、ぼんやりと通りを眺めた。携帯をあけたりしめたりしながら、それでも何日か前よりも落ち着いている自分を感じる。

もちろん、あの記憶が脳内に再生される瞬間、真歩は平静ではいられない。指先がしびれてくるのを感じる。これは、そう、パブロフの犬のようなものなのだと、真歩は自分に言い聞かせた。

待ち合わせの時間まであと三十分ほど。赤ちゃん用の衣類を選ぶのは心がはずんだ。今までも友達の出産祝いを買ったことはあったが、今回はなんとなく気持ちが違う。結婚を控え、自分もそのうちに子供にめぐまれるんじゃないかという予感が、彼女の気持ちを高ぶらせる。

ミルクの匂いがするすべすべのほっぺに、愛を込めてキスをする自分が思い浮かんだ。隣には直之。彼はきっとすばらしい父親になれるだろう。真歩の顔に自然と笑みがこぼれた。
すると突然、手のひらの中の携帯が震えた。
はっと、幸せな空想から引き戻される。
彼女はメールの着信表示を見て、息を飲み込んだ。

見たことのないアドレス。

一気に全身を血流が巡る。
どうか、どうか、彼からの着信ではないように・・・

そう願いながらも、期待している自分に言いようのない怒りが湧く。
わっと吹き出た汗を感じながら、メールを開けた。

「ひさしぶり。連絡が遅れてごめん。この間はとても楽しかったよ。懐かしくて、幸せな時間だった。お母さんとも、もっと話をしたかったな・・・そうそう、結婚祝いの話。考えておいてくれた？ぼくはこういうことが苦手で、まったく思いつかないよ。それで、もし予定がなければ、今夜一緒に食事でもどうかな？そのとき、何が欲しいか教えて。今夜の予定の有無をこのアドレスに返信して。待ってるから。」

真歩は何度も何度もその文を読み返した。
手が震えてくるのがわかる。心音が大きな音を立てて身体中を鳴り響いていた。
返信のボタンを押して、そのまま固まった。
なんと返信するのか、自分では決められない。
この衝動に任せるのか、それとも理性に耳を傾けるのか。
そしてありとあらゆる返信の文を考えているうちに、待ち合わせの

時間になってしまった。

雪が案内したカジュアルフレンチのレストランは、雑居ビルの二階にあった。狭い階段をのぼると、何の看板も出ていない扉がある。そこを開けると、家庭的な雰囲気の心地のよい空間が広がっていた。座席は全部で五つだけ。気持ちのいい態度のスタッフが「お待ちしておりました」と、窓際の座席に案内する。

雪は今買ったばかりのプレゼントを窓際に置くと、つややかな黒髪を耳にかけながら、席に座った。肩ひじをついて、メニューを読む。窓からの強い日差しが、彼女の頬をあたためる。スタッフがすかさずブラインドをおろした。

真歩は上の空だった。なんとか雪と会話をしているものの、頭のなかは先ほどのメールに占められていた。もう暗唱できるほどだ。

「このプリフィックスのコースでいいかな？」雪がメニューを差し出しながら訊ねた。

「うん。」真歩はろくに見ないで答える。

「どうする？前菜は？」

「うん。雪とおんなじで。」

「おんなじ？ほんと？」

「うん。」

雪はひとつため息をつくと、手際よく二人分の注文を終えた。

「今日はあんまり時間が取れないから、単刀直入に聞くけれど、どうしたの？」雪が真歩の顔をまっすぐ見つめて訊ねた。

「何から話していいか・・・」真歩はとりあえず話だした。

身じろぎ一つしないで、雪は聞いていた。その表情からは何を考えているかわからない。真歩は話してよかったのかどうか、わからなくなった。そもそも話したところで彼女の返答はわかっているのだ。ただ、少し、心情を吐露したいだけ。もちろん、よみがえったあの記憶のことも、先ほどの着信のことも話さなかった。

「わかってるでしょ？自分で。」雪がやっと水を一口のんだ。すでに前菜はテーブルにのっている。
「とにかく、食べましょう。わたし、本当に時間がないの。食べないと午後の仕事に差し支えるわ。」雪が前菜を食べ始めた。そして再び「わかってるのよね？」と言った。
「うん、わかってる・・・」真歩は雪が少し怒っているのじゃないかと思った。でもそれもそうだ。こんな答えのない話。
すると雪は少し緊張をといて、微笑んだ。「でも、真歩の動揺もわかるわ。芸能の世界に住む人って、本当にすごいオーラが出てるのよね。わたしもタレントさんを見るたびに、引き込まれるわ。媒体を通してみるのとは全然違うのよね。」
そして納得したというように頷きながら、「真歩は利明さんのファンになったのよ。」と言った。
「ファン、になったってことなのかな？でも、なんというか、それとも違うような・・・」真歩はしっくりこない気持ちで答える。
雪は疑いの表情を浮かべて、真歩をじっとみる。
真歩はいたたまれない気持ちになった。
「何か隠してるんじゃない？」雪はするどく訊ねた。すでにメインディッシュが来ている。雪はフランスパンを片手に、メインに取りかかった。
真歩は迷った。親友とはいえ、性的なことを赤裸々に語ったことなんかなかったのだ。それに今夜のこと。なんと言われるかわかりきっている。
真歩は言いよどんだ。
すると雪は「言いたくないのなら、それでもかまわないけれど。」と前置きしてから、「もし園田君を失いたくないなら、絶対その彼には会わないで。」と言った。
「わかってるでしょ？自分の立場が。真歩はこれから結婚する。利明さんとはかつて友達だったかもしれないけど、今は住む世界が違う。連絡をするということも社交辞令の可能性が高い。彼は魅力的

でいることが仕事なの。惑わされたくなかったら、絶対に会わないで。」雪の目は真剣だった。
そして真歩の方へ身を乗り出した。彼女の整った顔にいたずらっ子の表情がやどる。
「今真歩が園田君に会ってないから、そんなどうでもいいことに気を取られるのよ。忙しいのなんだのって言ってないで、押し掛けて抱いてもらったらいいのよ。それで全部解決しちゃうから。」
駅のホームへおりる階段のところで雪と別れた。彼女は何度も何度も真歩の方を振り返る。彼女の目が「愚かなことはするな」と厳しく言っているように見えた。

「押し掛けて抱いてもらえばいい」雪はそういっていた。確かにそんな気もする。真歩は銀座の地下道を歩きながら、どうすればいいか考え続けていた。メールの返信のリミットはもうすぐ。今夜の誘いなのだ。早めに連絡をしなければ。
すべきことはわかっていた。「今日は予定があるから」と断り、直之のもとに行く。そうするしかないのだ。でも真歩は思い切れない。わかってる。真歩は利明に再び会いたいのだ。
真歩は懸命に直之との将来を考えた。
失いたくない将来。
でも、と真歩は考える。今夜利明に会ったとしても、一緒に食事をするだけだ。かつての幼なじみとして結婚を祝ってくれる、それだけなのだ。利明の好意からくる申し出を断って、自分は思い上がりも甚だしいのではないか。
デパートの中を用もないのにうろうろとした。平日の夕方。そろそろここも混んでくる時間だ。ただその雑音も彼女の頭の中には届かない。
直之に会いにゆくのなら、電車に乗って家に帰ればいい。彼が帰っ

てくるまで家で待ってるのだ。
それなのに電車に乗れない。真歩は自分のふがいなさに、だんだんといらいらしてきた。
なんて弱い女なのだろう。愚かで痛い女。自分で答えがわかっているのに、身体の芯から溢れる衝動に身を任せたいなどと思っている。
「くだらない。」真歩はとうとうメールに返信をしようと、携帯を開いた。

そこへ狙ったかのような着信。
こんどは電話だった。
見知らぬ電話番号。

利明だ。

真歩の頭と身体は彼に一気に飲み込まれた。そして、理性的に考えるよりも前に、彼女は電話に出てしまった。
「もしもし？真歩？」
利明の声だ。低いが甘い声。
「はい。」真歩はやっとのことで返答する。すでに心臓はいつもの二倍の早さで動いており、頭の芯がくらくらした。
「メール見た？今夜なんだけど。突然だから予定あるかな？」
真歩は断るべきだった。「用事がある」と言わなくてはいけなかった。しかし彼女は「予定は何もない」と答えてしまっていた。
「そうか、よかった。もちろんごちそうするよ。」利明がうれしそうに言う。
彼は待ち合わせ場所を告げると、「またね。」と言って電話を切った。
真歩は半ば呆然としながら、デパートを出て銀座の町へと歩きだした。
太陽が今日という日をオレンジ色に染めて、別れを告げている。

空気はまだまだ暖かい。
都会にも関わらず、空気に緑が芽吹く香りがした。
真歩は肩にかけたバックのひもをぐっとつかんで歩いた。
乱れ動揺している自分を押さえたかった。
彼女は自分に腹が立っていた。
そして言いようもない嫌悪も。
でもその一方で「化粧を直さなくては」とも思っていた。

(十)

十

気持ちが浮き立つのを押さえることができなかった。

なんてことはない。食事をするだけ。

それなのに、こんな風に自分が取り乱しているのが、滑稽に思えた。

今すぐにでも直之に電話をして「今からいく」と言えたらいいのにと思う。

渋谷駅前のデパートのトイレで、真歩は念入りに化粧を直した。ハイライトを入れ、アイラインを強めに引いた。自然に見えるようにほお紅の入れ方には注意した。

鏡の中の自分を見つめる。

念入りに化粧をしたって、自分は自分で変わりない。

凡庸な顔立ち。

直之はこんな自分を愛してくれている。

真歩が一番きれいだと言ってくれる。

雪が言っていたように、直之が抱いてくれれば解決する事柄なのかもしれない。

「もし」真歩は考える。

「もし、利明に抱かれたら?」

そう考えて、真歩はカッと頬が熱くなった。なんて大それて身の程知らずの考え。

真歩は手早く化粧道具を鞄にしまうと、鏡の前から逃げるように、トイレから出た。

帰宅する人々を横目で見ながら、真歩は両手で身体を抱きしめて、夜にかけて強くなってきた風に体温を奪われないよう、身を縮めた。

春用のカーディガン一枚ではいけなかったと後悔する。
渋谷のブックファーストにたどり着いた。ここの一階で待ち合わせをしているのだ。寒さから逃れられると、少し小走りに建物に入る。そこは人でいっぱいだった。
「こんなところで待ち合わせなんて、大丈夫なんだろうか？」前回利明に訊ねたとき、「東京は大丈夫」と言っていたけれど、本当に？真歩は不安になった。
女性ファッション誌を手にとり、眺める。でも、彼女の頭には内容がまったくはいってこない。すぐに頭を上げて、周りを見回してしまう。真歩は完全に浮き足立っていた。
するとハンドバッグから携帯が鳴っている振動が響いてきた。慌てて取り出す。
直之からの電話だった。
「どうしよう」真歩は躊躇した。やましいことをしているわけではない。幼なじみと会って食事をするだけ。それでも彼女は直之に正直に話すことができなかった。
しばらく迷って、通話を押す。真歩はまだ利明が来ていないかどうか、周りを見回した。
「もしもし？」明るい直之の声がする。
「うん、どうしたの？」真歩はなるべく平静を心がけて対応する。
「今日さ、早く仕事が終わったんだ。今から会えないかな？」
「・・・」真歩は言葉を失った。神様が間違いを犯さぬよう、配慮してくれているかのようだ。
「どうした？予定あるの？」黙りこくる真歩に直之が聞いてきた。
「・・・うん。あるにはあるけど・・・」真歩は言葉を濁す。
どうする？どうしたらいい？
「予定があるのか・・・そうか・・・突然だしね。」直之が残念そうな声をだした。
とたんに真歩は堪え難い罪悪感に苛まれる。
慌てて「都合をつけるわ」と言いそうになって、ふと視界の隅に利

明の姿を捉えた。
彼は雑誌を開き、立ち読んでいるふりをしながら、こちらに顔を向けて、にこりと笑った。
先日かぶっていたのと同じ帽子。めがね。カジュアルなジャケットの下は、清潔そうな白いシャツ。細身のジーンズでより一層スタイルをよく見せていた。右手には大きなアナログ時計。ブルーの文字盤が印象的だ。
真歩のすべてが彼にもっていかれる、そんな気がした。直之の声がなにも残さず頭を通り抜ける。「ごめん、また連絡するね。」そういって彼女は電話を切った。
電話が終わると、利明は雑誌を棚に戻し、こちらに近づいてきた。誰も彼の存在に気づいていない。なぜ？こんなにも惹き付けられるのに。真歩は自分がどんなに呆然とした表情をしているか、想像して恥ずかしくなった。
「電話大丈夫？」利明が声をかける。
「うん、もう終わったから。」真歩が答えた。
そして二人で並んでブックファーストをあとにした。

外の空気の冷たさは、身体の先から徐々に内部を浸食する。利明は「こっちだよ」と住宅街の方を指差した。松濤方面へ二人で足早に進む。
「予約はしてあるから。」利明は真歩を気遣いながら、道案内するかのように、少し先を歩く。
そこは住宅街の真ん中で、ひっそりとしていた。誰もそこがお店だとは気づかないように思う。しっとりとした日本家屋。門をくぐると初めて、そこがイタリアンのお店だということがわかった。
お店に入ると利明は予約名を告げ、二人は奥座敷に通された。そこは床の間の間接照明と、テーブルの上のろうそく、そして窓から見える中庭の灯籠のみの明かりしかなかった。
「何を飲む？ワインとか飲める？」利明が畳に座るやいなや真歩に

訊ねる。
「えっと、甘めのものなら・・・」真歩はアルコールを飲んではいけないのではないかという最後の自制心を無視してしまった。
「じゃあ、そうしよう。」利明は襖のところでずっと待機していた店員に伝えると、「それからいつもの。」と言った。
「よくここにはくるの？」真歩は訊ねた。
「そうだね。ここはプライバシーにも配慮してくれるし、味もいい。何より、畳でイタリアンなんて面白いから。」そして彼は笑った。利明は帽子をぬぎ、右手で髪を整えた。眼鏡をとってテーブルにぞんざいにおく。ろうそくの揺らぎで、彼の顔もいろいろな表情を見せた。

優しげだと思えば、恐ろしいとも感じる。
微笑んでいても、悲しんでいるように見える。
とにかく、これほど美しい人は見たことがなかった。

それから二人はたわいもないことをしゃべりあった。
天気の話から始まって、最近見た映画の話、仕事の話、それから学生時代の話。
食事が始まると、お酒の力もあってか、話がはずんだ。
真歩は最初は重ならなかった昔の記憶が、時間が経つにつれ徐々にシンクロし、目の前にいる男性が隣に住んでいた利明であることを納得し始めていた。
髪をかきあげる仕草。箸を口に運ぶときの様子。笑ったときに見せる目尻。どれも見覚えのあるものだった。
食事もそろそろ終盤に差し掛かるころ、利明がジャケットのポケットからタバコを取り出した。
「吸ってもいい？窓開けるから。」
「もちろん。でも知らなかった、吸うんだ。」
「ああ、食後なんかは欲しくなるよ。でも秘密にしといて。」利明

がいたずらっ子のような表情を浮かべる。
「事務所の方針で、ぼくは吸わないイメージでいきたいらしいんだ。」
彼は窓を細く開け、タバコに火をつけた。
直之はタバコを吸わない。
タバコの苦く甘い香りと夜の冷たさが混じり合って、真歩はたまらなく刺激された。
「変わらないように見えて、」利明がタバコを持ったまま、真歩を見つめる。
「そうじゃない。ぼくたちは大人になった。」利明がゆっくりと言う。
「真歩はもうすぐ結婚する。ぼくの隣に座って、お菓子をほおばっていた小さな女の子とは違うんだな。」
利明は手をのばすと、テーブルの上に置かれていた彼女の左手の薬指に光るリングを、中指でそっとなぞった。

真歩は全身がしびれた。

利明が彼女を見続ける。真歩はいたたまれなくなって、手を引っ込めようとしたが、指先をぎゅっとつかまれた。
「おぼえてる？」利明の声がいつもより低く感じる。
真歩の心臓が一つ大きくはねた。
「何を？」やっとのことで答える。
彼は笑みを崩さない。
「真歩の家の押し入れ。とても蒸し暑かった。」利明がタバコの煙を吐き出す。
「身体から心臓がでてしまいそうだった。でもどうしたらいいかわからなかった。ぼくたちがとても幼かったから。」
真歩は言葉を発することができない。
「でも今なら・・・」利明が指で真歩のリングを支える。

「あの先に何があるのか、わかってる。」利明はそういうと、彼女の指をなぞるように離した。
真歩はこの鼓動が利明に聞こえてしまうのではないかと思った。頭はしびれ、正常な判断はアルコールのせいで全くできなくなっている。
息ができない。そう思った。
利明はそんな真歩の様子を見ると、まじめな顔になり「結婚祝いは何がいい？」と訊ねた。
「考えたんだけどね、特にリクエストがないならば、掛け時計なんかどうかな。新居のリビングに飾ってもらうんだ。そろいの食器やなんかは、きっとたくさんもらうから。」
「・・・はい、じゃあ、それで、お願いします。」真歩はやっとのことで答える。声はうわずっていた。
利明はまた微笑むと「ワイン少し残ってるよ。もうデザートだから、飲んじゃえば？」といって勧めた。
「大丈夫だよ、酔っても。車を呼ぶから。家まで送らせるよ。」

タクシーの扉がしまると、利明は軽く手をあげた。口が「また連絡するよ」と言っているように見える。真歩が窓からそれを確認するやいなや、タクシーは自宅の方へと出発した。
高速道路をまっすぐに走る。美しい都会の夜景はあっという間に消え、東京郊外へといくにつれ、夜の暗さが増してくる。
真歩はまだ芯が震えていた。身体の中心がうずいている。利明が真歩のリングを指でなぞったときの光景が、何度もリプレイされる。
「覚えている？」と訊ねたあの唇。微笑み。タバコの香り。
口当たりの柔らかいあのワインのせいだけではない。真歩は身体が熱かった。
「唇を重ねたらきっとタバコとワインの香りがするだろう。」
そう考えて、真歩はさらにどうしようもなくなってきた。

真歩は衝動的にタクシーのドライバーに行き先の変更を告げた。
直之のアパートにつくと、部屋の窓からの明かりを確認した。真歩は小走りで外階段を上がり、預かっている合鍵で扉を開けた。
部屋の中には、くつろいだ格好の直之がいた。ベッドの上で雑誌を読んでいる。直之は突然入ってきた真歩にびっくりして飛び起きた。
「どうしたの？」直之が立ち上がってこちらに来る。
真歩は靴を脱ぎ捨てると、直之にしがみついた。
「どうした？」再び直之が訊ねる。
「抱いて。今すぐ。」真歩は直之の胸に顔を埋め、言う。
真歩は電気を消すと、二人でベッドに倒れ込んだ。
「顔が見えないよ。」直之が言う。
「だめ。電気はつけないで。」真歩が言う。
そして激しく唇をあわせた。

「彼」がわたしを抱く。
その長い指でわたしの身体をなぞる。うずくような感覚が全身に広がって、わたしは思わず声がでる。「彼」のその唇が敏感な箇所を探し当てる。じらすように、そして執拗に攻め立てる。わたしは大きな快感に唇を噛み締めた。

「入れて。早く。」真歩は吐息のような声で懇願した。

「彼」がわたしに入る。熱くて、そこから溶けてしまいそうだ。もっと、深く。もっと、激しく。身体全部で「彼」を感じる。

内から溢れ出る例えようもない激しい感覚で、真歩はあっというまに絶頂に達した。

荒い息使いのまま、真歩はシーツに顔をうめた。直之が彼女を背後から抱き寄せ、身体をぴったりとくっつける。互いの汗が密着度を高めた。
カーテン越しにも、夜の冷気が感じられる。
窓の外は痛いほどの静けさ。
風はやんだようだ。
「シーツから洗剤のいい香りがする。」真歩は頬をシーツにつけたまま言った。
「真歩がもしかしたらくるかもしれないと思って、きれいなのに取り替えたんだ。」直之が穏やかに答え、彼女の耳に愛しげにキスをした。
そして真歩は静かに泣き出した。

（十一）

十一

ゴールデンウィーク前には、直之の仕事の忙しさも一段落した。それから二人は連休中、結婚の準備を熱心に進めた。
結婚式の招待状の発送。
引き出物の選択。
席順の決定。
そして引っ越し準備。
二人が新居に選んだのは、真歩の実家近く、築十五年の二ＬＤＫのマンション。しばらくは直之だけがそこに住み、挙式が住んだら真歩が移り住むことに決めた。直之の部屋から持ち込めるものは、すべて持ち込む。ただカーテンと大きな冷蔵庫だけは新調した。
ベランダは狭いながらも南向きについており、真歩はそこにベランダ菜園を作ることに決めた。小さいながらも幸せな新居。いよいよ、二人で新しい暮らしをスタートさせるのだという気持ちにさせた。
あれ以来、利明から真歩に連絡はなかった。
真歩は正直ほっとしていた。
冷静になって振り返ると、利明のあの言動は、久しぶりに再会した幼なじみにはふさわしくない。
「きっと彼も酔っていたんだ。」真歩はそう思うようにした。
ただ、あのときの利明を思い浮かべると、真歩には再びどうしようもない衝動がわき起こる。しかし「自分は最低なことをした」という自覚から、真歩は必死に平静を装った。特に直之には絶対に悟らせまいとした。
「彼を愛している。」その気持ちには変わりなかった。
「彼を傷つけたくない。」それも同時に強く思う。
このまま利明からは連絡がこないでほしい。

この高熱が下がれば元の通り、直之と夫婦になれるのだから。
でも真歩は携帯電話の利明の登録をどうしても消すことができなかった。
真歩がこの気持ちになんとか折り合いを付けようとしていた頃、雪から新サロンオープンのパーティに来ないか、という誘いがあった。電話で雪と話ながら、真歩は窓からの新緑の香りを楽しむ。
季節はどんどん動いていた。
「でも、わたしなんかが行って、場違いじゃないかしら？」真歩は心配になって訊ねた。
「何言ってるの？パーティと言ったって、小規模のものよ。有名人なんか来ないしね。心細いなら誰か他につれてくれば？園田君とか。」
「直之はその日仕事が遅いって言ってたから・・・じゃあ、会社で一緒だった女の子誘ってみようかな。いいの？本当に？」
「いいに決まってるじゃない。手ぶらできてね。でも多少化粧してこなくちゃだめよ。ジーンズはお断り。」そう言って雪は笑った。
雪とはあのランチ以降まともにしゃべっていなかった。彼女も忙しかったし、それに真歩も「利明と会った」とはいいづらかったから、連絡しなかったのだ。
雪はこの件に関して何も言わない。確かに更なる忠告をしたって、真歩の問題なのだから無駄だとわかっている。雪は頭がいい。無駄なことはしないのだ。
電話を切ると、真歩はクローゼットを開けた。引っ越しに向けて整理された衣類を眺める。その中でパーティに着ていけそうなものは、友人の結婚式できたシンプルな濃紺のワンピースだけ。これに少し大振りなアクセサリーをつけたら、華やかに見えるかしら？
真歩はそのパーティを思い浮かべ、少し楽しくなった。
雪の新しいサロンは、目黒川沿いの雑居ビルにあった。駅からは徒

歩十五分ほど。アクセスが良いとは言いがたかったが、いつも人通りが多いところだった。桜が咲く頃であれば、すばらしい景観だろう。真歩はそう思った。
元同僚の咲子と、二人連れ立って歩いた。道々、インテリアショップやカフェなど、新居のレイアウトに参考になりそうなお店には、自然と目がいってしまう。
真歩は紺色のワンピースに、この日のために新たに購入したアジアンテイストのペンダントとブレスをつけ、いつもより高いヒールの靴をはいた。この靴にもきれいな石があしらってある。髪は美容室でまとめてもらい、ネイルは雪がするのを見よう見まねで自分で手入れしてみたが、よく見るとうまくぬれておらず、少々がっかりした。咲子も華やかなイエローのワンピースに身を包んでいる。
サロン前にはたくさんの花が飾られ、夜の目黒川沿いを彩っているようだ。すでに人は溢れんばかりだったが、パーティ自体はサロン右隣のスペイン料理の店を貸し切って行われているようだ。サロンから出るお客達は、そのままレストランへと流れ込む。心地の良い夜風が川から吹いてくる。そのせいか、人々の顔はみな穏やかだ。
雪はサロン前に背筋を伸ばして立ち、来客ひとりひとりにこやかな笑顔を見せ、挨拶をしていた。
こんな時、雪は本当に美しく見える。彼女は凛と見える上質なパンツスーツに、シンプルな本物の真珠のネックレスをしていた。美しい肌は上気して薄桃色に輝いている。長い黒髪は、サロンの照明を反射して、つややかだ。
彼女は真歩の姿を目にとめると、手をあげて満面の笑みを見せた。
「ありがとう、来てくれて。」雪は真歩の手を取り感謝を表した。
「おめでとう。」真歩は手に持っていた華やかなブーケを手渡した。
「もう、手ぶらできてって言ったのに。でもありがとう、うれしいわ。」雪はその香りを楽しむように、花に顔を近づけた。
真歩は咲子を紹介し、忙しそうな雪を気遣って「またね。」といってサロンへと入った。

広尾のサロンよりもずっと広かった。他のサロン同様、インテリアを白で統一し、清潔感を出している。左右に並ぶネイル用の座席、そして奥には個室がもうけてあるようだ。
美しく着飾った女性達が、サロンを品定めしているように感じた。しかしながら、おおむね好評のようだ。みな、一様に軽く興奮している。きっとこのサロンも繁盛するだろう。
真歩と咲子の二人は、そのままレストランの方へと移動した。
レストランは吹き抜けの二階建てで、両フロアともこのパーティのために貸し切っているようだ。バーカウンターで甘めのカクテルをもらう。立食パーティなので、奥のテーブルには、おいしそうな匂いのスペイン料理が大皿に盛られていた。
二人は一階と二階両方をカクテル片手に見て回り、結局一階の入り口付近のコーナーに立つことにした。
次々と入ってくる客を見やる。二十代後半から四十代の女性達が、上品な身のこなしで歩いている。みな、上客なんだろう。真歩はそう思った。
その中に、ひときわ目を引く女性がいた。壁際に並べられた椅子の一つに、足をくんで腰掛け、赤ワインを飲んでいる。年は若くは見えるがおそらく四十代なかば、豊かな髪をゆるくカールさせ、大胆なスリットの入った黒いスカートをはいている。そこから見える長く細い足は、いやに官能的だった。
彼女がグラスに唇をつけるという、ただそれだけの仕草が、あまりにも意味ありげに見える。
「こんな女性もいるんだ。」真歩は自分との差にすこしがっかりした。咲子も小声で「すごいね、あのひと。」と耳打ちした。みんな、見るところは一緒なのだ。
そこにパーティの主催者が入ってきた。雪はその女性とはまた違った美しさを放っている。むしろ中世的とも言えるかもしれない。真歩は雪の存在に、誰よりも憧れている、そう自覚していた。
雪が一階フロアの中央に立って、丁寧な挨拶をし、パーティがスタ

ートした。
真歩と咲子は忙しそうな雪には話しかけず、飲んで食べることに専念した。他に知っている人もいなかったし、やっぱり、なんとなく場違いなところにいるような気にもなっていたからだ。
料理はすばらしかった。通常営業の時にも来てみたい、真歩と咲子はそう言い合った。
咲子は幼い顔をしている。真歩と同年齢にも関わらず、まるで中学生のよう。ただ、彼女が笑うと、周りにいる人も思わず笑みになる、そんな女性だった。こんな人を求める男性もきっとたくさんいるだろう。真歩は咲子のその雰囲気が大好きだった。
おいしい料理を口にしながら、二人でくだらない話をしていると、真歩の目の端に、先ほどの女性と雪が話しているのが映った。相変わらず女性はワインを飲んでおり、組んだ足もそのままだ。雪はその女性の横に腰を屈めて座り、にこやかにはなしている。雪の様子をみていると、その女性もかなりの上客なのだろうと推測した。
するとその女性が優雅に立ち上がり、「もう失礼するわ。」というような身振りをした。雪も深々と頭を下げる。そして、その女性は真歩たちの側を通り過ぎ、玄関から出て行った。彼女の甘い香りが、真歩たちを包んだ。
真歩はその女性をウィンドウ越しに目で追う。

そこに、利明が立っていた。

帽子と眼鏡はかけていたが、見間違うはずがない。川の欄干に持たれている。しかし女性がでていくと親しげに近寄っていった。
女性は「待たせた」という素振りも見せず、利明に近づいて、挨拶代わりか、彼の頬にそのきれいに整えられた指先で触れる。利明も微笑むと彼女の髪を優しくかきあげ、そのまま彼女の耳をなぞった。
真歩は完全に停止していた。

その情景が語ることは、明確だ。
二人は親しい関係なのだ。
手が、足が、心臓が震えている。
二人が連れ立って歩き出す。真歩の視界から消えてしまう直前、利明と目があったような気がした。
咲子もその光景を目撃し、興奮したように真歩に耳打ちする。
「あれ、俳優じゃなかった？間違いないよね。」
「そうよ。あの女性は芸能事務所の社長さんなの。」突然後ろから声がして、びっくりして振り返る。
雪がいつのまにか背後に立っていた。顔には変わらぬ笑みをたたえている。
「あの俳優の方は、時々広尾のサロンのところにも、彼女を迎えにきているわ。なんだか、社長とタレントっていうだけじゃないように見えるわよね。」雪が言った。
咲子がそれを聞いて、さらに興奮している。雪はそのまま「じゃあ、まだまだ楽しんでいってね。」と言って、その場を立ち去った。
咲子がしきりに真歩に話しかける。
でもその半分も彼女の耳に入っていなかった。

雪はだから真歩をこのパーティに呼んだのだ。
釘をさすために。
本当に効果的だった。
口で何度も忠告するよりも、よっぽど大きな一撃だった。

（十二）

十二

パーティからの帰り道。暗い川沿いを歩く。
何度も利明とあの女性社長との情景が再生される。
そして静かな笑みをたたえた雪の顔も。
真歩が愛しているのは直之、ただ一人。
それは真歩が繰り返し繰り返し考えて、たどり着いた結論だ。
では、この動揺といらだちは、いったいなんだろう。
街灯が道なりにぽつぽつと白く浮いて見える。
これが嫉妬と言われる感情なんだろうか。
真歩はこれまで、自分をこれほど愚かで馬鹿な女だとは思ったことがなかった。
すると前方、街灯の下に、見覚えのあるセダンが止まっているのが見えた。

利明の車ではないだろうか？

そう思って、真歩は胸がざわついた。
慎重に歩を進める。
彼女が車にあと数歩というところで、運転席の扉が開いた。
やはり。利明が先ほど見かけたのと同じ格好でおりてきた。街灯の明かりが帽子をかぶった彼の顔に陰を落とし、その表情はよく見えない。真歩の心臓が猛然と血液を送り出す。
彼女は立ち止まった。
しばらく二人は見合ったまま、言葉がなかった。真歩はなんと言っていいのかわからない。いや、そもそも言いたいことがあったとしても、とても言えなかっただろう。それくらい利明の存在に、真歩

のすべてが飲み込まれてしまっていた。
「さっき、パーティにいただろう？」利明が低い声で話しかけてきた。
「いたわ。」真歩はやっとそれだけ答える。
利明は一歩真歩の方へと近づく。反射的に真歩は下がる。
すると利明の口元が少しあがるのが見えた。
「車にのって話せない？」利明はそういうと、大股に真歩に近寄り、腕をとった。薄手の生地を通して、利明の体温を感じる。
それだけで真歩の身体が燃えた。
彼女の理性が行くなと叫んでいる。
けれど彼の瞳を見てしまうと、そんな叫びはまったく聞こえなくなってしまった。
おとなしく助手席に座る。
そして車がスタートした。

ハイブリッド車特有の静けさが車内に広がる。
利明は帽子を取り、無言で車を運転する。
窓から入り込む夜の明かりが、利明の顔や首を次々と照らす。
顔に笑みはなく、瞳はまっすぐと前を見ている。
今までみたどの利明よりも、本物の彼のような気がする。
「悲しい」真歩はその表情をみて、そう感じた。
車はそのまま首都高速へと入っていく。
「どこへいくんだろう？」真歩はだんだんと不安を感じ、一方で静かな興奮も増していた。
高速の単調な道を無言でしばらく走っていく。
真歩は声をかけることもできず、押し黙った。

「君はぼくの失われた子供時代の象徴だ。」
高速に乗って二十分ほどたったあと、利明が突然しゃべりだした。
「あの町を離れてから、ぼくは子供らしく振る舞うことを許されな

くなった。」
彼の表情はかわらない。感情もなくしゃべっているように見える。
「母と二人で暮らした時間は短かった。ある日ぼくが学校からアパートへ帰ってくると、母はぼくを置いて家を出ていた。」
「え？」真歩は驚いて声をあげた。
利明は、胸の奥底から言葉をかき出しているようだった。長い沈黙を挟みながら、ゆっくりと告白していく。
「母の帰宅が遅いのは、日常茶飯事だった。男がいたんだと思う。そう気づいたのは、母がいなくなり、親戚の家をたらい回しにされているときに聞いた、おじやおばの陰口からだ。」
「両親が離婚したとき、ぼくは母を苦しめた父を恨んだ。でも今になって考えると、父もつらかったんだと思う。覚えてるかい？ぼくの母を。」ちらりとこちらをみやる。
「母は美しかったよ。幼心に自慢の母だった。長くまっすぐな黒髪をいつもきれいにとかしつけて、ぼくをだきしめるときにはおしろいの香りがした。でも・・・」
「自分が一番大切な人だった。ぼくはそんな母を目にするたびに、言いようのない寂しさを感じていたんだ。幼いときにはなぜ寂しいと感じているのか、自分でもまったくわかっていなかったけどね。」
車は関越道の方向へ向かっているようだ。どんどんと東京を離れていく。
「ぼくは置かれている立場を理解して、うまく自分の居場所を確保しようと必死だった。そうするうちに、気づいた。どう振る舞えば、他人が自分の思い通りに動いてくれるのか。特に、女性に対してね。」自嘲するかのような笑みが口元に浮かぶ。
「自慢して言えるようなことは、何一つしてきていない。今の立場も必死に生きてきた結果だ。恥ずかしくて泣きたくなるようなこともした。生きるためには必要だったから。」
「自分のこの人生とは裏腹に、みなが賞賛を浴びせてくる。」
「嫌になった。」利明の顔が歪む。

「あの夜、車を運転していたら、思い出した。家の斜め前に大きな桜の木があったことを。隣に仲のいい女の子が住んでいたことを。そしてぼくがほんの子供だったことを・・・気づいたら昔の家の前に立っていた。」

真歩はあの夜、家の前にたたずんでいた利明を思い出した。

「君を玄関で見たとき、記憶と感覚がわっと蘇った。君のお母さんが作ってくれたお菓子の甘いバニラの香り、家のなかを君とふたりで駆け回った時の弾むような気持ち、そして唇を重ねたときのチョコレートの味。」

「あまりにも君が昔と変わらなかったから。」

「もう少し触れたい。もう少しこのノスタルジックな世界に触れていたいと、ぼくは欲をだしたんだ。」利明が静かに言う。

「でもいざ触れてみると、どうしようもない感情がうまれた。ぼくが失ったすべてを、君は変わらずに、さも当然というように持っている。」

「君から奪いたいと思った。その日常を。」

「ぼくは結局、あの母親の子供なんだ。一度その考えにとらわれたら、それが倫理的にどうであれ、行動を止められない。ぼくはこれまでたくさんの女性達にしてきたのと同じことを、君にもした。」

「君が心乱れていることはわかった。ぼくを見るときの目が、その他の数多の女性と同じだったから。」

「軽蔑した？」

真っ暗な山々の間を切り開くようにつながる高速道路をひた走る。

真歩は少し考えて「いいえ。」と答えた。

真歩自身、利明に軽蔑されるようなことをずっと考えている。

とても軽蔑したとは言えなかった。

「そして、僕はまた君の了解を得ずに、こんなところまで車で連れ出している。これも軽蔑されてしかるべき行為だ。ぼくはまだ、君から奪いたいと思っているんだ。正直に話して、軽蔑されてもなお、僕は自分を止められない。」

「でもそれと同時に、君から欲しいと思ってる。」
真歩が利明の横顔を見つめる。
「何を？」真歩が静かに問うた。
車が高速をおり、山道をゆっくりと上る。
ライトが真っ暗な道路を心細げに照らす。
「うまく言葉では言えないんだけれど・・・欲しいっていう衝動があるんだ。」
門の明かりがゆらゆらと揺れているのが見える。
車は山奥の小さな旅館の駐車場に静かに乗り入れた。

控えめで礼儀正しい仲居が、利明と真歩を離れへと案内した。
石畳の回廊を通ると、深夜のしっとりとした空気が、真歩の薄着の身体を包む。真歩は両手で身体を抱いた。
湿った濃い緑の香りと虫の気配。ほんの近くのところに川が流れているようだ。優しげな水音が聞こえる。
離れに通されると、仲居はお茶の支度を手早く行う。
そしてそっといなくなった。
清潔な新しい畳の香り。十畳ほどの部屋が三つ。中庭へ通じるガラス戸から部屋付きの露天風呂へとつながっている。痛いほどの静けさのなかで、たっぷりなお湯が砂利に染み入る音が聞こえるようだ。
そして、一番奥の部屋にはすでに二組の布団がしかれていた。
真歩は入り口に近い場所に立ち尽くしていた。依然として両手で身体を抱いている。室内の暖かさは十分だったが、こうしていないと身体が崩れてしまいそうに緊張していた。
利明は上着を脱ぎ、腰を下ろした。
「座れば？」利明が入れたてのお茶に口をつけた。
真歩は緊張しながらも、利明の向かいに座った。
「寒い？お茶があたたかい。おいしいよ。」利明が真剣な面持ちで言う。

言われるがままにお茶をすすった。渋くて暖かい。真歩の真ん中がじんわりと緩んでくる気がする。
しばらく二人は無言で、お茶を飲んだ。
時刻はすでに深夜０時に近い。
「どうしたい？」利明が口を開いた。
真歩は一瞬言葉につまる。「どうしたいって・・・」
「ぼくは車でも言ったけれど、君の日常を奪ってやりたいと、今も強く思ってる。たぶん君という存在への強い嫉妬からだ。」

「わかるだろ？ぼくがどうしたいと思って、きみをここにつれてきたか。」

真歩は手が震えてくるのを止められない。
でもそれは決して恐怖からではなかった。
「きみを抱きたい。愛や恋ではない。嫉妬と、そう、懐古的な感情から・・・でも」利明が真歩の顔をまっすぐ見ていった。「無理強いはしたくない。君が嫌だといえば、ぼくはすぐにでも君を家までまた送り届けるつもりだ。」
考えるまでもなかった。真歩の身体はすでに、利明に飲み込まれているも同然だった。彼の言葉ひとつひとつに全身が反応している。
こんなことは初めてだった。
「わたしは・・・」真歩はかすれる声で言った。「再会してからずっと、あなたに抱かれたいと思っていた。でも愛とは違う。それはわかってる。愛している人がすでにいるから。それが愛という感情だと知っているから。」
真歩は続ける。
「わたしたちが幼ければ、これを恋と呼んだかもしれない。でもそれも違う。わたしたちは大人になった。まったく昔と変わらないなんて、そんなことあり得ないのだから。」
真歩は利明の顔をみつめた。こんな風に正面から彼の顔をためらい

なく見つめることなんて、これまでできなかった。もう覚悟が決まったのだ。
利明はそれがわかると、彼女の手をとり、布団の上に連れて行った。
白く清潔なシーツの上に二人で向き合い座ると、利明は彼女の髪に手を触れた。髪をまとめていたヘアピンを丁寧にとると、彼女の髪を下ろす。利明は柔らかなその手触りをしばらく感じているようだ。
そして真歩の頬に触れた。
真歩は触れた箇所から電気が走るような衝撃を感じた。緊張している。いや、それ以上の高まりが彼女を支配していた。
利明の指が真歩の唇に触れる。
真歩が軽く唇を開く。
そして利明が真歩に優しく口づけた。
タバコの苦い香りが少し。
そして覚えのある感触。
利明は徐々に深部にまで入り込み、真歩はそれだけで最後まで到達してしまいそうになる。
二人はそのまま崩れるように倒れ込み、激しい抱擁をかわした。
利明の手が紺色のワンピースのファスナーを手早くおろし、彼女からその一枚をはぎとった。アクセサリーもつぎつぎと外していく。
真歩は乱暴とも言えるその行為に、さらに激しく反応する。利明のシャツの下に手を差し入れ、彼の体温と汗を感じた。
直之とは違った手の大きさ。直之とは違った身体をなぞる道。ゆっくりと時間をかけて真歩を高めるのではなく、奪いたいと言ったその言葉どおり、彼女の全身を強引に利明のものにする。しかし利明は真歩が何を望んでいるのか、的確にわかっているようだった。
真歩はこらえきれず、声をあげる。
「いいよ、もっと声をだして。ここは誰にも聞こえない。」利明が耳元でささやく。熱い息がかかると気が狂いそうになった。
真歩は徐々に大胆に利明を求めだす。

利明のすべてに溺れ、乱れている。
「欲しい・・・あなたが。」喘ぎながら懇願した。
すると、利明は真歩の足を持ち上げ、激しく挿入した。
真歩はこれまで感じたことのないような歓喜の波に飲み込まれた。
たまらず、荒い息で喘ぎ、声をあげる。
利明の腕に必死にしがみつき、この快感に耐えようとする。
激しく揺さぶられると、身体の中心から最後の高まりが溢れ出そうになった。
真歩のその様子に気づいたのか、利明は彼女の身体をきつく抱きしめる。壊してしまうかのような動きと、それから守るかのような抱擁。
「いくわ・・・」真歩の身体が大きく震え、のけぞり、利明を締めつけた。
利明もそれに続き、短い吐息とともに、終わりを迎える。

荒い息のまま見つめ合った。
互いの頬に手をあてる。
そして充足の笑みをかわした。

一晩中、お互いの身体を全身で感じながら、額をつけ、頬をつけ、唇をつけ、時たまさわる敏感な箇所に小さく笑いながら、過ごした。
それから二人で短い時間まどろみ、布団から出している腕に優しい日差しを感じて、朝を迎えた。

布団から出て、身支度をしてしまうと、昨晩のことはあまりにも曖昧な記憶でしかなかった。あれほど狂おしく利明を求めたのに、今隣にいる男性とそんな関係を結んだなどとは思えない、真歩はそう思った。
鞄から携帯電話を取り出すと、直之からの不在着信が二件、そして

雪からは「ごめんね。」という一文が書かれたメールが入っていた。
二人は、木々の間からおりてくる朝の冷たい空気を感じながら、旅館を後にした。昨日は山奥だということしかわからなかったが、長野の温泉街から少し離れた一軒宿だったということがわかった。従業員も少ない。通常の客室はなく、離れが五つから六つほどしかない。お忍びでくる客が多いのか、無粋な視線などいっさい感じなかった。
再び無言で東京へ向かう。
新しい関係が始まった訳ではない。
真歩はこれで終わりなのだと、運転する利明の横顔をみて思った。
相変わらず利明は整った顔立ちをしていたが、真歩にとっては、それ以上でもそれ以下でもなくなっていた。昨日までは、彼は彼女の非日常そのものであったけれど、今の彼は隣に住んでいた利明であり、遠くへ引っ越していった、また再び会うことのない幼なじみだった。
利明は真歩を昨夜車に乗せた場所で、再び彼女をおろした。
今日は川風が強い。
二人の髪が風で乱れた。
もうすでに初夏の香りがする。
日差しはかなり高くなっており、アスファルトからの照り返しが暖かい。
幾人かの人とすれ違ったが、誰も利明の存在には気づかなかった。
利明は真歩の側まで歩み寄ると、静かにその瞳を見つめた。
「ぼくは花嫁にひどいことをした。それはわかってるんだ。」利明は風で乱れた真歩の髪を耳にかける。
「でも、幸せになって。」そう言った。
真歩は、利明が再び遠いところへ引っ越していくような、そんな錯覚に陥った。
真歩は小さくうなずいた。
「わたしから欲しいといっていたもの、手に入れることできたの？」

彼女は訊ねた。
「うん、どうかな？それがわかるのは、もうしばらく時間が経ってからだと思うけど。」利明が考えながら答えた。
利明は真歩の額にそっとキスをする。
それはまるで幼い子供がするような、ぎこちない口づけ。
利明は少し上気した頬に、優しい笑みを浮かべた。
「さよなら。」彼が言う。
「さよなら。」彼女が答える。
そして車が走り去った。

真歩は一人で歩き出す。
その瞬間、「真歩が大好きなんだ。」と頬を染め恥ずかしそうに言った男の子がいたことを思い出した。その日も風が強く、男の子の黒い髪は風になびいていて、真歩がその子の髪を手でとかしてあげたことも。
そして利明が真歩から欲しいと言ったものが何なのか、なんとなくわかったような気がした。

それから、真歩は家にたどり着くまでの間、少し泣いた。

（十三）

十三

結婚式を一週間後に控え、真歩は忙しく過ごしていた。
式自体の準備はすでにほとんど終了し、あとは本番を迎えるだけだったが、結婚後の引っ越し準備が今や佳境を迎えており、私物の取捨選択に時間を費やしていた。
そんな真歩の姿をみて、父が徐々にナーバスになってきているのがわかった。真歩は会社を退職してもなお、結婚するという実感がわいてこなかったが、その父の様子でやっと「家を出るんだ」という一抹の寂しさが真歩を襲ってきていた。

雪とは連絡していなかった。「ごめんね。」というメールの返信さえもしていない。そもそもなんと話してよいのかもわからなかったし、正直にすべて話す勇気が、真歩にあるとも思えなかった。招待状はすでに発送してある。結婚式の会場で少し話ができればいい、そう思っていた。
直之への思いは、以前とまったく変わらなかった。不思議な感覚ではあったが、真歩の中で、利明との間にあったできごとは、心のどこか別の場所に大切にしまわれていて、直之との関係に影響があるということはなかったのだ。
もちろん、利明からの連絡はなかったが、それで真歩は納得していた。

そんな日に、真歩は自分の体調の変化に気がついた。なんとなくむかむか胸焼けがして、けだるい。
真歩は自分が妊娠したということが、直感的にわかった。

「どちらの子供かわからない。」

風邪ともまた違うけだるさと吐き気を感じながら、あらかた整理された部屋のベッドに転がった。
梅雨の湿気が空気を重くする。
窓から見える空はどんよりと曇り、いつ降り出してもおかしくなかった。
真歩は懸命に日数を計算したが、はっきりしたことはわからない。
前回の生理から考えても、今はまだ妊娠二ヶ月。
直之の子供かもしれないし、利明の子供かもしれない。
赤ちゃんができたという事実になんとなく感じた幸福感は、一瞬にして危機感へと変化した。

このまま事実を隠したまま、直之と結婚できるのか？
直之との子供だったらいい。
でも利明との子供だったら？
徐々に成長する子供に利明の面影をみつけたら？
嘘を突き通すことができるのか？
そもそも血液型が一致しなかったら？
考えれば考えるほど、追いつめられている自分がいた。
これまでの人生のなかで、こんなに窮地に立たされたことはなかった。

どうしたらいいだろう。

利明に連絡するという選択肢はなかった。
彼とはもうすべて終わっている。
彼は今、自分の存在する世界で懸命に生きているだろう。
真歩のほうへ引きずり込むなどという考えはおこらなかった。

子供をあきらめる。
その方法もあるだろう。
おそらく一番波風の立たない方法。
真歩さえ黙っていれば、誰も傷つかない。
でも。
今おなかに宿るこの新たな命は、歓び、悲しみ、そんな経験をする前に命を刈り取られる。
自分にそれを一人で背負う勇気があるだろうか。

ベッドの上で考え続ける。
誰かに決めてほしかった。
救ってほしかった。

自分の軽率さで招いたこと。
もちろん利明と一夜をともにしたことを後悔はしていなかった。彼とのことはもっと別の次元のこと。でも子供ができたとなると、そんな説明は意味をなさない。
携帯を開けて雪からきたメールを見る。
彼女なら、真歩に正解とはいわないまでも、最善の道を示してくれるかもしれない。
彼女はいつも冷静で強い。
あんな女性になれたらと、何度憧れたことだろうか。
雪ならこんな間違い、決しておかさないだろう。
だからあんなに手厳しい警告を発してくれたのに。
真歩は自分の衝動に従ってしまった。
真歩はためらいながらも、雪の携帯に電話をかけた。

雪のマンションまでタクシーを走らせる。
真歩は体調が悪く、とてもではないが電車に乗る勇気はでなかった。

時刻は夜の十時ごろ。電話でのただならぬ気配にびっくりしたのか、雪は「なるべく早くに帰るから。」と言ってくれた。
真歩はけだるいからだと吐き気に耐えながら、なんとかタクシーを途中でおりることなくマンションまでたどり着けた。化粧をする気力もなく、新たな命が「殺さないで」と必死に叫び声を上げているかのように感じて、身体の内部から震えがくるのを感じた。

部屋につくと、心配げな雪が真歩を迎え入れた。彼女はまさに帰ってきたばかりというように、まだ着替えもすんでいなかった。髪は後ろで一つにまとめ、その隙のない身なりは、女性経営者そのものであった。
「どうしたの、その顔色！」雪は真歩の顔を見ると、びっくりして声をあげた。慌てて彼女をソファに座らせる。
「紅茶かコーヒー飲む？」雪がキッチンの中から真歩に声をかける。
「ううん、いらないわ。」真歩は柔らかいソファーの背もたれに身を預けて、天井を見上げた。これから雪に話すことを考えると気が重かったが、重荷を分け合えるのではないかという期待もあった。キッチンからコーヒーの香りが漂う。いつもならうれしいこの香りが、どうしたことか嫌悪の対象となる。
「ごめん、コーヒーの匂いが今だめで。」真歩は鼻と口を押さえて言った。
「え？」コーヒーメーカーの前に立っていた雪の手が止まる。彼女はあわてて換気扇を回し、匂いを外に追い出した。そして水を片手に、真歩の側に座った。
「赤ちゃん、できたの？」雪が真歩にそっと問いかけた。
「うん、たぶん。」真歩はうつむきながら答えた。
「おめでとう！よかったじゃない。」雪の明るい声が部屋に響いた。そして「ちょっとフライングだけどね。」と言って、真歩の腕をたたいた。
「園田君にはもう報告したの？」雪は真歩の顔を覗き込むように聞

いてきた。
「ううん、まだ。」真歩は消え入りそうな声で答える。
そこで雪は真歩の様子がなんだかおかしいことに気づいたようだ。
「園田君の赤ちゃんなんでしょ？」雪がゆっくりと確認するように訊ねる。
「・・・わからないの。」真歩は顔を手で覆いながら答えた。
「真歩、あなたまさか。」雪の声にわずかないらだちが混じったような気がした。
真歩は顔を手で覆ったまま、雪の顔をみることができない。今、雪に軽蔑されている、そんな風に感じた。
「もう、いっそのこと、この赤ちゃんをあきらめるのも、ひとつの方法かと思って・・・」雪に救いを求めるかのように、言葉が口をついて出てくる。
「産まれて、もし直之の子供じゃないとわかったら、わたしは終わりよ。子供と二人きりで、わたしが生活していけるとは思えない。」
真歩は話しながら、遠くない未来にそんなことが現実として起こりうるのだと、さらに一層危機感が強まった。
「どうしたらいいと思う？雪。本当にどうしたら・・・」真歩は涙が込み上げてくるのを止められなかった。

「じゃあ、ちょうだい。」

雪とは思えないような、冷たい声音だった。
真歩はびっくりして顔を上げる。
雪は真歩の顔を見ている。その表情はこれまで一度も見たことのないようなものだった。美しくすべらかな肌に暖かみはない。瞳の奥には小さな怒りの火が熱く燃えている。いつも完璧だと思っていたその顔からは、ひどくアンバランスな印象を受けた。
「誰だろう、この人」そう一瞬思ってしまうほど、雪は雪ではなくなっていた。

「園田君の子供かもしれないんでしょ？じゃあ、わたしにちょうだいよ。」
真歩は雪のその表情に圧倒されて、言葉がでてこない。
「わたしは園田君の子供、ほしかったけど、堕したもの。」雪が言う。
真歩はその言葉の意味を理解するのに、しばらく時間がかかる。なんどもその言葉を頭の中で繰り返し、やっと彼女のいわんとすることがわかった。
「嘘よ。」あまりの衝撃で、真歩は少し声を荒げる。
真歩の高まる熱とは対照的に、雪は冷えきっていた。
「嘘じゃないわ。園田君との子供、わたし堕ろしたの。だって・・・」雪の顔に命がやどる。それは生々しい女性としての表情だった。
「園田君が堕ろして欲しいって、頭を下げたんだもの。真歩のことを失いたくないから、わたしに子供を産まれたら困るって。真歩を失わずにいられるなら、鬼でも悪魔でもなんでもなるって！そんな風に頼まれたら、産みたいだなんて、言えるわけがないでしょ！」
最後の方は悲鳴のようだった。
雪が真歩の腕をつかむ。その美しい爪が肌に袖を通して、肌に突き刺さった。
「でもあんたは、あんたは、その欲望か、感傷か、くだらない一時的な感情で、園田君とは別の男性とセックスして、勝手に子供つくって、それでいて産まないですって？ふざけないでよ！」
雪の目から一筋の涙がこぼれる。
「わたしは子供が欲しかった。園田君との子供が。彼に愛されて、幸せな家庭を築きたかった。休日には公園を家族で散歩して、芝生の上でお弁当を広げて、子供の幸せが何より一番なんだと笑い合いたかった。あんたはみんな持ってたのに、わざわざ自分からそれを手放したのよ！」
真歩は何も言えなかった。完全に思考が停止してしまっているかのようだ。

真歩は身動き一つできない。
とても信じられない。
でも。
雪のその表情を見ると、現実なんだと思った。
「いつごろ？」真歩はやっとのことで声に出す。
雪は再び氷のような表情にもどった。「大学四年のころ。」
「そんな、少しも気づかなかった。」真歩はあの頃の雪と直之を思い出したが、彼女の話と一致するような兆しは一度も感じたことがなかった。
「あんたに気づかせる訳ないでしょ。甘くて何の覚悟もない、お嬢さんのあんたに。」睨みつけるその瞳の中に、見覚えのある陰り。
真歩はこの陰りを何度も目にしたことがあったような気がした。
「決してはしゃがない彼女。それは幸せじゃなかったからだ」真歩は気づいた。
真歩は雪に何も言えぬまま、マンションを後にした。

（十四）

十四

真歩は帰りのタクシーの中で、つわりの吐き気も気にならないほど、心臓がつぶされるような思いにとらわれていた。
雪と直之。
二人の間に子供ができていた。
考えると手足がかっと熱くなり、度数の高いアルコールをあおったかのように、身体中がその熱さで震えた。

嫉妬。
きっとこれが嫉妬。

嫉妬という感情は、こんなにも身体全部で訴えるものなのだ。
利明のときに感じた嫉妬という感情は、だだをこねる子供のわがままにすぎなかった。

直之に確認したい。
すべて嘘だと証明してほしい。
あの優しさ。
あの誠実さ。
完璧なまでの演技だったとは思いたくない。
もちろん、雪と直之が肉体的に関係を持ったという事実も、真歩自身を打ちのめしていたが、それよりも二人が秘密を共有していたということに、それ以上の嫉妬を感じた。
二人は子供の命という秘密を共有していた。
二人は死ぬまで忘れないだろう。
自分たちの子供が、親によって命を奪われたことを。

タクシーの振動を身体に感じながら、真歩はそっとおなかをなでた。
ここにも新しい命がある。
雪と直之は二人で秘密を共有できたが、真歩の場合は違った。
子供をあきらめる場合、真歩一人でその罪を背負わなくてはならない。

「子供を産もう。」そう思った。

どちらの子供でも、自分の身体から文字通り血や肉を分け、産まれてくる。
そしてそう覚悟すると、身体中を占領していた嫉妬という感情の隙間に、狡猾な自分が見えてくる気がした。
結婚式まであと一週間。
真歩はタクシーのドライバーに行き先の変更をつげると、シートに深く身を沈めた。

ぽつぽつと雨が降り出していた。
今年の六月は梅雨といえども雨が少なく、どんよりとした空気に囲まれはするものの、毎日毎日うんざりするほど雨が降るということはなかった。
直之はすでに二人の新居に引っ越していた。
自分たちの新しい住まい。
築年数は古いが、もとは分譲マンションなので、作りはしっかりしている。
何十世帯かの窓からは、暖かい家族の明かりが見えていた。
ベランダで植物を育てている家庭。
ベランダに子供用玩具を置いている家庭。
窓すべてに暮らしが見えた。
自分に渡された鍵を使う。

合鍵ではない。
自分の鍵だ。
部屋に入ると、直之はすでに帰宅していた。
カーテンだけがかろうじてかかっているが、その他はまだ内覧したときとほとんど変わっていないその部屋で、直之は段ボールの上に雑誌を開いて、コーヒーを飲んでいた。
雨が本降りになってきたようだ。
ベランダからコンクリートを雨粒が強くたたく音が聞こえる。
ワックスをかけたばかりのフローリングは、蛍光灯の光を反射して、真歩の陰をくっきりと映す。
「あれ？」直之が顔を上げて、真歩を見た。
真歩はしっかりと直之の顔をみつめた。

彼はいつもと変わらない。
変わったのは彼女のほうだ。

真歩は無言で部屋に上がり込むと、直之の前に座り込んだ。
フローリングが冷たく、固い。
直之がベッドからまるめた毛布を持ってくると「敷いた方がいいよ。」と言った。
真歩は言われた通りにその毛布を下にしくと、また再び直之の方を向いた。
「どうしたの？」直之は真歩の面持ちがいつもと異なることに気づいて、警戒した声を出した。
「子供ができたの。」真歩は静かに話だした。
「え？本当？」直之の顔がぱっと明るくなり、これ以上はないとうくらいの笑顔をみせた。
「本当よ。でも、あなたの子供かどうかわからない。」真歩はきっぱりと言い切った。

瞬間、その場の空気が凍り付いた。
まさに凍り付いたという言葉がふさわしいほど、しびれていたくなるほどの冷たさが、二人の間に入り込んだ。
真歩はその痛さに負けまいとするかのように、背筋を伸ばした。
「嘘だろ？」直之は信じられないというような面持ちで、真歩に問うた。
「嘘じゃないわ。あなたの子供かもしれないし、そうじゃないかもしれない。わたしにはわからないの。」
「そんな・・・」直之は絶句し、それから徐々に激高してきた。
「なんだよそれ。あと少しで俺たちは結婚するんだぞ！」興奮して立ち上がり、足が段ボールの簡易テーブルにぶつかる。コーヒーがこぼれた。

「わたしにも堕ろせっていうの？」真歩は感情を抑えた声で言った。
直之の動きが止まった。
真歩の言葉を必死に受け入れようとしているようだ。
怒りに飲まれようとしていた全身が、今度は自分の窮地に気づいた。
「何をいってるんだ？」直之が全身から警戒信号を出している。
こんな彼を見るのは初めてだった。
「雪には子供を堕ろさせたでしょ。」
「何の・・・」直之は反論しようとしたが、真歩の確固たる表情を見ると、言葉につまった。
どしゃぶりの雨がベランダを洗っているようだ。
絶えない水音が外から聞こえてくる。
二人の間に沈黙が流れた。
どちらが先に切り出すか、切り出してしまえば、もう元には戻れない、そう考えると慎重になる。
「誰の子供なんだ？」直之が目をそらし、うつむいて訊ねた。
「あなたの子供かもしれない。」真歩は静かに答える。

「いや、ぼくの子供じゃなかったら・・・」
「・・・幼なじみの。でも、一度きりよ。」
直之が大きく息をはく。
「なんで・・・いや、そうか・・・」直之ががっくりと腰を下し、さめたコーヒーに口をつける。
「雪には悪いことをしたと思っている。」直之は垂れた頭をあげることができない。
「雪との関係は衝動的だった。」直之はつぶやくように言った。
真歩は改めて直之が関係を認めたことに、殴られたような衝撃を感じたが、その表情を見せないようぐっとこらえた。
「雪が弾むような声で『妊娠した』と言ってきたとき、自分の軽率さに震えた。死ぬほど後悔したし、どうすれば真歩を失わずにすむか、毎日考え続けた。『堕ろす』なんていう恐ろしい結論に至ったのも、自分としては当然だった。」そこで直之は顔をあげ、真歩を見つめる。
「きみを失うくらいなら、どんな恐ろしいことでもできた。誰を傷つけても、子供の命を奪ってさえも、きみが側にいてくれるのなら・・・」直之はすがるような目で真歩を見た。
「必死だった。」直之はかすれた声で言った。
真歩はまっすぐ直之の顔を見返す。
取り乱してはいけない、そう自分に言い聞かせた。
「信じていた相手に裏切られるって、こういうことなのか。」直之は再びうつむいた。膝に置いた手が心なしか震えているように見える。
「結婚・・・どうする？」直之が問いかけた。
「あなたはどうしたい？」真歩が改めて問いかける。
「ぼくは・・・わからない。真歩に許されるのか。それに、その子供・・・ぼくはどうしたらいいのか・・・混乱していて。」
「以前のようには、あなたを愛せない。」真歩は言った。
「わかってる。」直之が答える。

「今、あなたの胸にある、その感情で決めて。」真歩が直之の目を見た。
「愛、嫉妬、嫌悪、贖罪、欲、その他様々な感情のうち、今あなたは何に支配されている？」
「いや、わからないよ・・・混乱して。考える時間を・・・」直之が戸惑う。
「時間はないわ。」真歩は冷たく言い放った。
「結婚式は一週間後で、子供はどんどん大きくなる。」真歩は手をおなかにあてた。
「だから今決めて。」
直之の視線は真歩の顔と彼女のおなか、彼女の指に光る婚約指輪の上をさまよい、最後に自分の手をみつめた。
そして「決めた。」と言った。

（十五）

十五

式場の控え室で、真歩は鏡に映る自分を見つめた。
幸いなことに、梅雨にも関わらず快晴だった。
窓から差し込む光は、磨かれた床できらきらと反射し、純白のドレスの輝きを増している。
真歩はこの数日間で痩せてしまい、首や肩のラインが一回り小さくなってしまっていたが、その瞳はしっかりと前を見据え力強い。
扉をノックする音がし、両親が控え室に入ってきた。
「真歩、あんた大丈夫なの？」母が真歩の体調を気遣った。
母は白髪染めを行ったばかりのきれいな黒髪を一つにまとめ、この日のためにタンスにしまっていた着物を着ている。
「うん、大丈夫よ。」真歩は微笑んで、答えた。
「具合が悪かったら、式を中断してもいいんだからね。」母親は真歩のベールを手で直しながら、彼女をいとおしそうに見やった。
「ねえ、お父さん。真歩きれいね。」
「・・ああ。」父親は言葉少なだ。
「ああ、もう、直之くんたら。もうちょっと子供は後でもよかったのに。真歩がつらそうで。」母親が眉間にしわをよせるものの、笑顔を見せる。
「いいのよ、わたし、幸せなんだから。」真歩がきっぱりと言い切ると、母親も父親もこみ上げるものがあるようだ。

「結婚するなら、この子供には自分の出自を悟らせないような、完璧な父親になってほしいの。雪の子供が得るはずだった愛情を、すべてこの子に注いでやって。」
あの日、真歩は直之にそう言った。

直之は、真歩が他の男性に抱かれたのは、自分の過去の過ちのせいだと思っている。

「そう思わせておこう。」真歩は考えた。

タクシーの車内で、嫉妬という感情が身を焼き尽くそうとしているまさにそのとき、真歩は心の一部分に安堵とも言える開放感も感じていた。

「助かるかもしれない」彼女は思ったのだ。

子供を産むためには結婚するしかない。

真歩はすでに三十歳。会社を退職したばかり。子供と二人で生きていくために、新たな仕事を探すにしても、よい条件では見つからない。

直之はこれから、贖罪の気持ちを込めて、必死に真歩と子供を受け入れようとするだろう。それがたとえ心からの愛に変わらなくとも、彼は子供には気づかせないはずだ。真歩にも、これまで一度たりとも自分の過ちを気づかせたことがなかった。彼が必死になれば、完璧な父親を演じることができる。

傍目から見れば、なんと狡猾でなんと卑怯な女。直之の罪悪感につけいり、自分と子供の保身を約束させた。真歩はその事実に愕然としながらも、そんな自分を躊躇なく受け入れようとしていた。

「ではそろそろ。」式場のスタッフが花嫁を呼びにきた。

式場に併設された教会の扉が開くと、純白の道の向こうに直之が立っているのが見える。ステンドグラスから入る色とりどりの光が、十字架を縁取る。そして直之がゆっくりとこちらを見た。

その顔からは覚悟がうかがえた。

これからの彼の人生。

これからの彼女の人生。
そして子供の人生。
全力で生き抜く覚悟。

真歩は父親の腕に手を添えて、ゆっくりと歩き出した。
これは想像し、夢見たような結婚ではない。
でも今この瞬間の方が、「結婚」という契約にふさわしい。
友人席に雪が座っているのが見えた。
真歩の方を見ようともしない。
まっすぐと前を向いている。
彼女は黒のシンプルなドレスに、燃えるような紅い口紅。
窓から差し込む清らかな光の中では違和感があった。
真歩はそんな雪の姿を見ると、また正面を向きなおった。
父親の腕から、直之の腕へ。
そして二人は、神と参列するすべての人々に、永遠の愛を誓った。

挙式の後、披露宴が行われた。
中規模の会場の中では、お祝いのスピーチや友人達の余興など、他の結婚式と何一つ変わりない、幸せな宴。
司会の女性が、祝電をいただいた方の名前を読み上げる。
「この方からは、電報ではなく直筆のお手紙でいただいていますね。」真歩はその女性の方を向いた。
「中には、まあ！」司会の女性はうれしい声をあげた。
「これはシロツメクサでしょうか。押し花のついたカードですね。」
彼女は封筒からカードを取り出すと、新郎新婦の方に掲げてみせた。
真歩は「幸せになって。」そう言った利明の声を思い出す。
そしてそっとおなかに手を触れた。
子供を愛しいと思った。

両親に花束を渡して、披露宴が終了する。
直之と真歩は出口で出席者一人一人に丁寧な挨拶をした。
雪が二人の前に立つ。
一分の隙もない完全な女性。
「おめでとう。」雪が静かに声をかけた。
三人の間には、他人には決してわからない緊張感が漂う。
「わたし、産むわ。」真歩は雪の瞳を見つめる。そして手をさしだした。
「ええ・・・産んで。お願い。」雪はそう言うと、涙を一粒、その頬に落とす。
そして差し出された手を握り返した。

人々は幸せなこの夫婦を心から祝う。
花嫁の凛とした美しさをほめたたえる。

式場の外はすでに夏が始まる香り。
二人で歩む人生が、今日始まった。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8784n/

衝動

2010年10月19日10時09分発行